Ⅳ．研究開発Ⅲ　評価開発

１．評価項目及び評価開発の概要

SGH の様々なカリキュラムごとのアンケート結果の分析や、本校オリジナルの新たな評価指標の開発について報告する。それぞれの掲載箇所は表 IV-1 を参照されたい。

表 IV-1　評価グループの報告の概要

項目	掲載箇所
生徒の資質能力の変容調査	
・PROG 調査と SGH 生徒アンケートの分析 （SGH3 期生の 3 年間の変容）	本章 2
各プログラムの評価とカリキュラムの効果測定	
・3 年生（SGH3 期生）課題研究総括論文の効果	第 II 章　4(4)
・2 年生（SGH4 期生）研修旅行の効果	第 II 章　5-1.(6)
・カンボジア FW の効果測定	第 II 章　5-2.(5)
グローバル・リーダーの新たな評価指標（GPAT）の開発	
・GPAT について	本章 3(1)
・GPAT による今年度の分析	本章 3(2)
保護者・本校教員・学校関係者の意識調査	
・保護者アンケートの分析	本章 4
・本校教員アンケートの分析	本章 5
・課題研究発表会（1 月 11 日）　参会者アンケートの分析	第 II 章　6(3)
成果の普及（教員研修・交流会（1 月 9 日）の成果と課題）	
・教員研修・交流会参加者へのアンケート結果	本章 6(5)

２．生徒の分析（SGH3 期生の 3 年間の変容）

本校は、生徒の「4 つの力」の変容を客観的に評価するために、行動面（課題に対してどのような対応・行動を行うのか）と認知面（自己をどのように認知・評価しているか）の 2 つの側面から評価を行っている。ここでは、SGH3 期生の（1）行動面と（2）認知面の変容の詳細を報告する。

（１）行動面の変容　～PROG-H 調査による分析～

本校では、生徒の資質能力を客観的・定量的に測定するために（株）リアセック社及び河合塾の PROG-H 調査を平成 26 年度より毎年全学年に実施（1 年 4 月、2 年 4 月、3 年 7 月）している。この調査により、グローバル人材に求められる「知識等を活用して問題解決をする力（リテラシー）」と「自分を取り巻く環境に実践的に働きかけ対処する力（コンピテン

シー)」の 2 つの観点から測定している。どちらも 1～5 の 5 段階で点数化され、生徒には各項目の点数と共に、テストからわかる自分の特性がフィードバックされる。

本校の掲げる「4 つの力」と PROG-H 調査の調査項目はいくつか重複する点があるため、現状はこの PROG-H 調査と（2）で報告する本校のアンケートを客観的に分析することで、生徒の変容を評価・分析している。以下、本校が育成を目指す「4 つの力」のうちの「課題解決力」「セルフマネジメント力」「コミュニケーション力」と関係するリテラシーとコンピテンシーの変容を報告する。

a　リテラシーの変容

図 IV-1 は、SGH3 期生（本年度 3 年生）の 3 年間のリテラシーの変容を示したものである。リテラシーは「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」の 4 つの項目で構成されており、本校の「4 つの力」の「課題解決力」と密接に関係する。以下、これらの項目の伸長を全国の高校生と比較しながら報告する。

SGH3 期生は、1 年時から年々伸び、3 年時までに「情報分析力」「課題発見力」の平均値がそれぞれ 0.85(0.50)、0.67(0.38)上昇し、顕著な伸びを示した（括弧内の値は今年度の全国高校生の高校 1 年から高校 3 年までの平均の伸びを示す。以下同じ）。

図 IV-2 は、SGH3 期生の 3 年時のリテラシーの平均値と全国の高校 3 年生と SSH・SGH 校の 3 年生の平均値と比較したものである。本校の SGH3 期生は、リテラシーの全ての項目において全国の高校 3 年生より平均点が高い。全国の SSH・SGH 校の 3 年生と比べ、SGH2 期生は、ほぼ同じスコアであったが、3 期生は「構想力」はわずかに劣るものの、「情報収集力」「課題発見力」は上回り、「情報分析力」は大きく上回っている。SGH3 期生は「平野メソッド」を用いて 3 年間課題研究などに取り組んだ学年であり、本校の SGH カリキュラムが「情報分析力」の育成に有効であると考えられる。

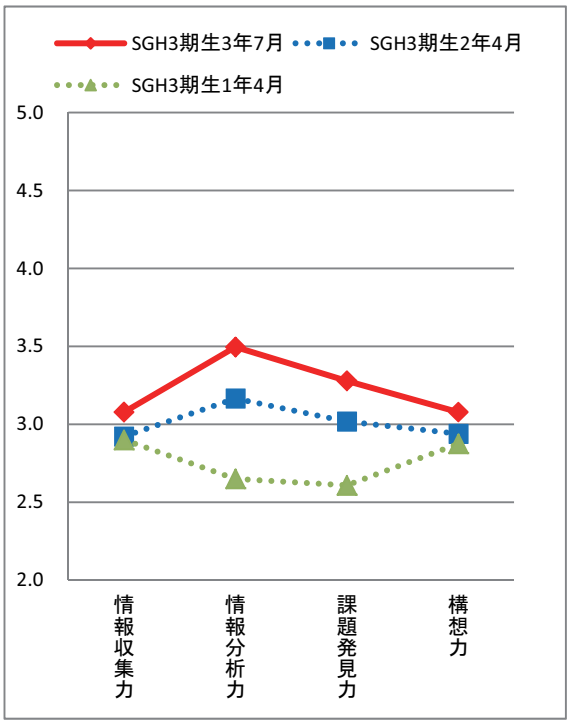


図 IV-1　リテラシーの変容

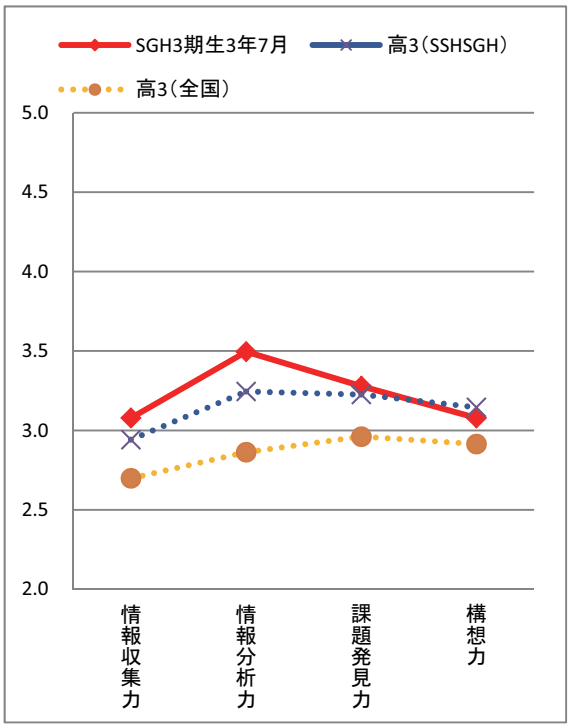


図 IV-2　リテラシーの比較

b　コンピテンシーの変容

図 IV-3 は、SGH3 期生のコンピテンシーの 3 年間の変容を示したものである。コンピテンシーは「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」の 3 つの項目で構成されており、それぞれにさらに 3 項目ずつの下位項目（グラフ右側）がある。

「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」は、それぞれ 0.03(-0.04)、0.17(0.02)、0.15(0.12)、総合点数では 0.11(0.02)上昇しており、上記すべての項目において、全国の高校生より大きく伸びている。特に、「対自己基礎力」「対課題基礎力」が大きく伸びており、各下位項目である「感情抑制力」「行動持続力」「課題発見力」が伸びている。本校の「4 つの力」である「セルフマネジメント力」と「課題解決力」が伸びていると考えられる。

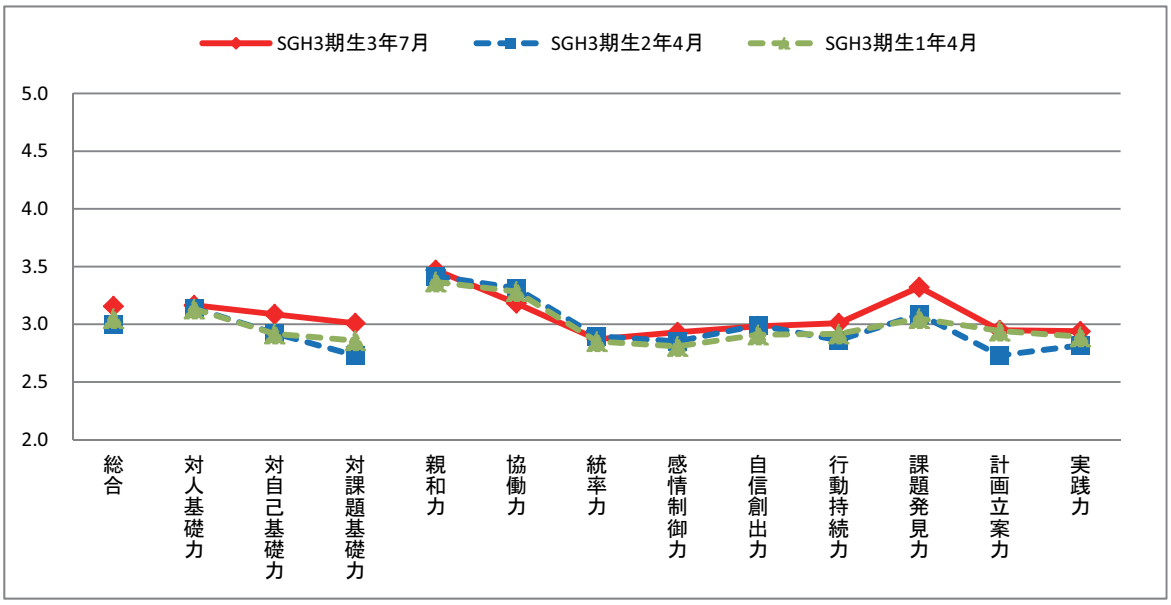


図 IV-3 コンピテンシーの変容

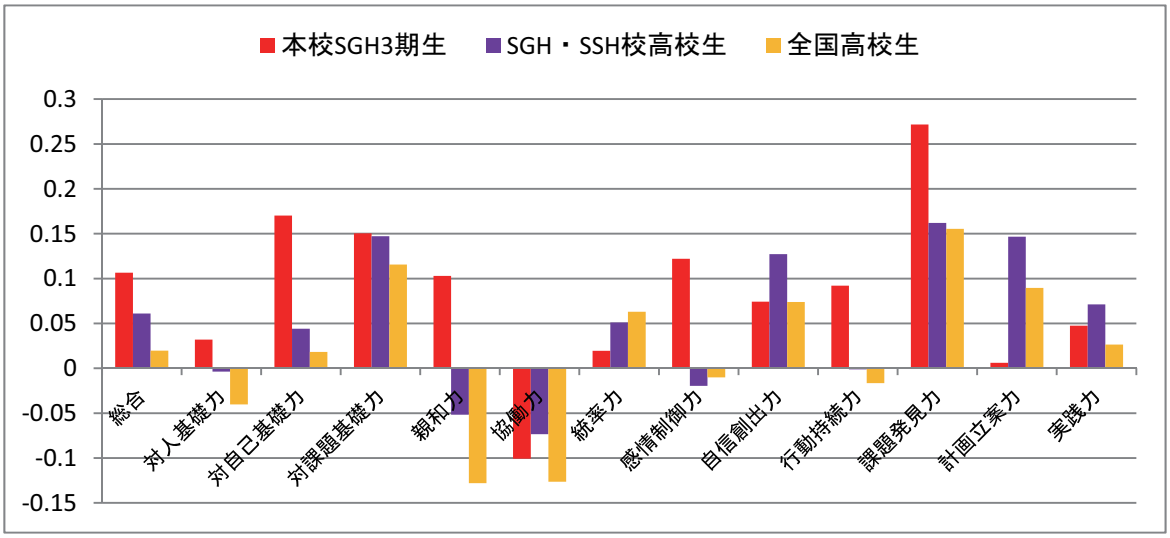
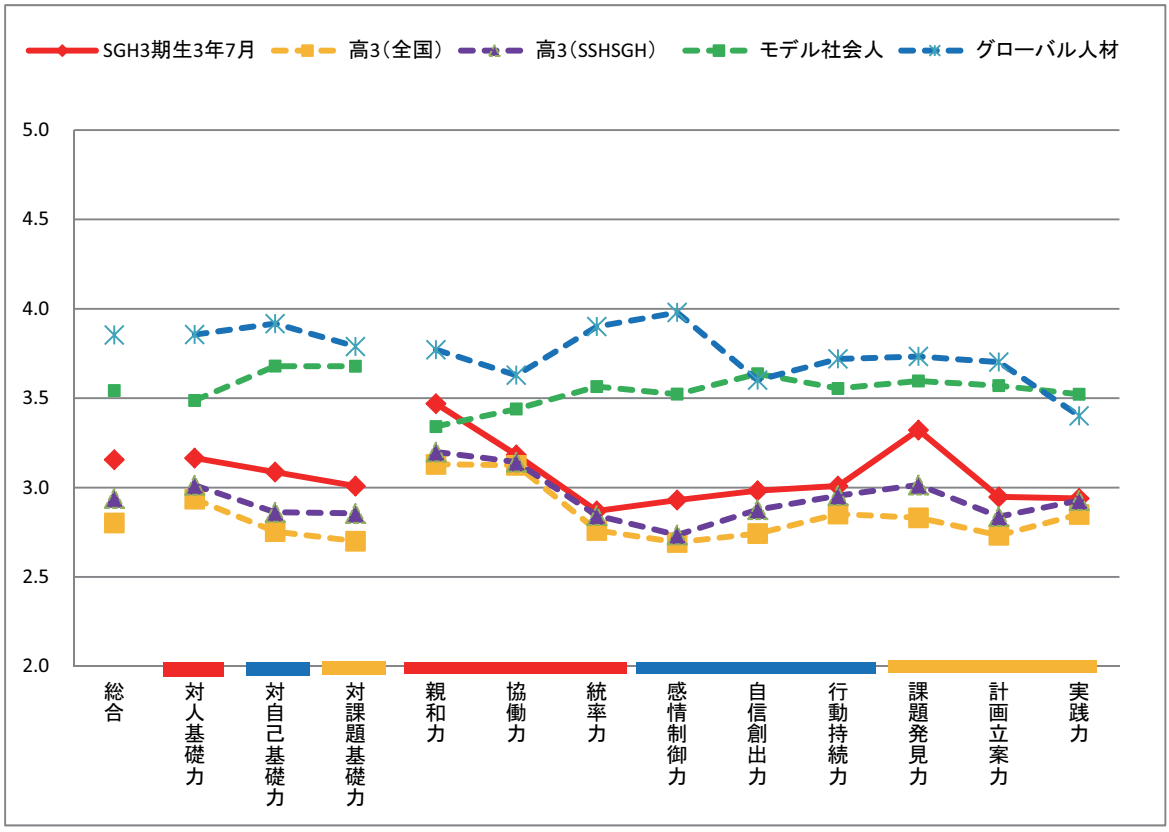


図 IV-4　コンピテンシーの伸長（高校 3 年間）の比較

図 IV-5 は、SGH3 期生の 3 年時のコンピテンシーの平均値と、全国の高校 3 年生、SSH・SGH の高校 3 年生、モデル社会人、グローバル人材の平均値を比較したものである。SGH3 期生の平均値は全国の高校 3 年生及び SSH・SGH 校の高校 3 年生より高く、すべての項目におい

て SSH・SGH 校の高校 3 年生より顕著に高くなっている。モデル社会人やグローバル人材との差はまだまだあるが、カリキュラムの成果が十分に出ていると考えられる。



図Ⅳ－5 コンピテンシーの比較

図 IV-6 は、これまでの SGH1 期生から 3 期生の 3 年時のコンピテンシーの比較を示したものである。「総合」の点は 1 期生から 3 期生になるにつれ高くなっており、3 年間のカリキュラム開発の成果が現れている。特に、課題研究の指導法「平野メソッド」では、「親和力」「課題発見力」「計画立案力」の伸張に重点をおき研究開発を進めてきたが、そのことも成果に現れている。

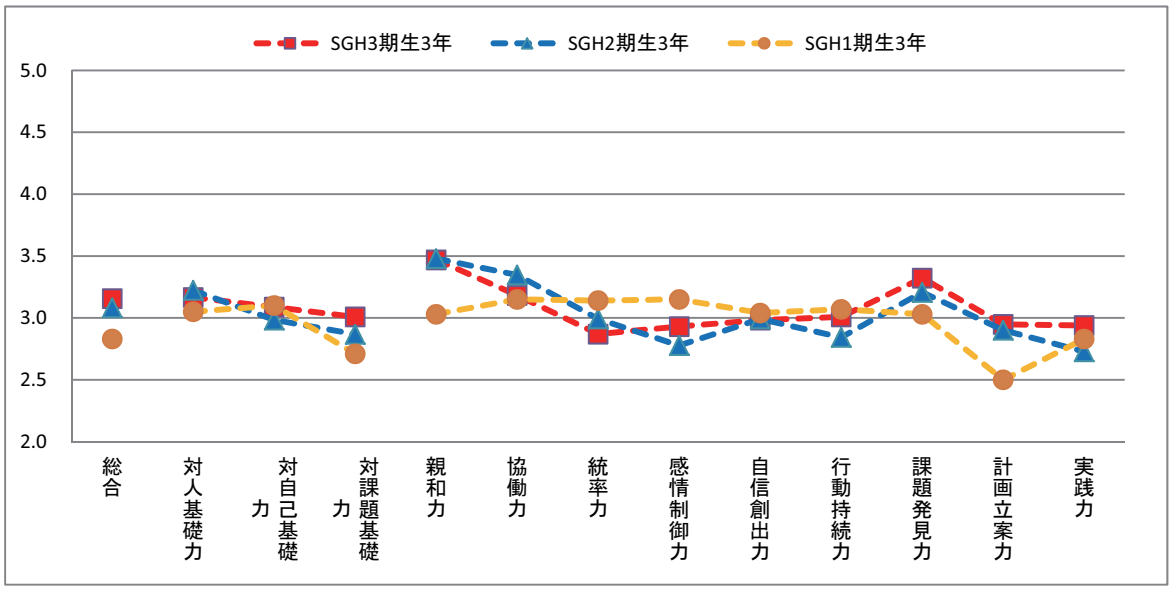


図 IV-6　SGH 過年度生とのコンピテンシーの比較

（２）認知面の変容　～SGH 生徒アンケートによる分析～

SGH3 期生の認知面について、経年によるアンケート調査の結果から変容を報告する。SGH3 期生は、本アンケートを１年４月、２年４月、２年２月、３年９月に行っており、a ではグローバル課題について「議論、説明する自信の変容」、b では「知識に関する変容」、c では「課題解決に関する変容」について報告する。

a　グローバル課題について「議論」「説明」する自信の変容

以下に示すアンケート結果は、「まったくそう思わない」、「あまりそう思わない」、「少しそう思う」、「とてもそう思う」、「無回答」の割合を４期にわたる比較で示したものである。

図 IV-7 は、本校の課題研究の３つの研究領域（「医療・保健」「防災・減災」「格差・貧困」）から自分が選択した研究領域（選択領域）について「問題を他者に説明することができるか」の問に関する３年間の変容を示したものである。

「とてもそう思う」の割合が年を追うごとに増加し、他の項目については減少する傾向が見られる。少しずつではあるが年を追うごとに生徒は自信をつけてきている。

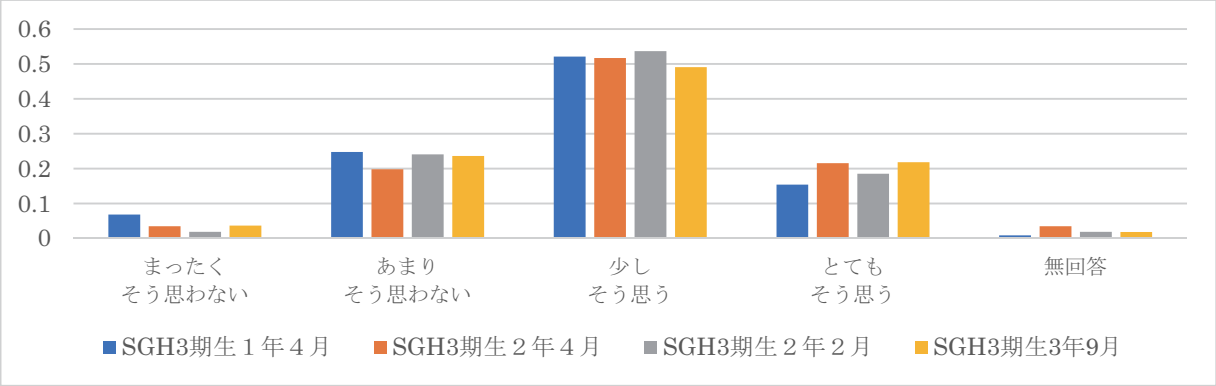


図 IV-7　自分の関わった分野・領域の問題を他者に説明することができる

図 IV-8 は、研究していない領域（選択外領域）について「問題を議論することができるか」の問に関する３年間の変容を示したものである。３年次に「少しそう思う」と「とてもそう思う」の割合が大きくのびており、第３学年おいて、選択外の研究領域も踏まえながら作成する「いのちに関する総括論文」に取り組むことにより理解が深まり、自信がついたと考えられる。

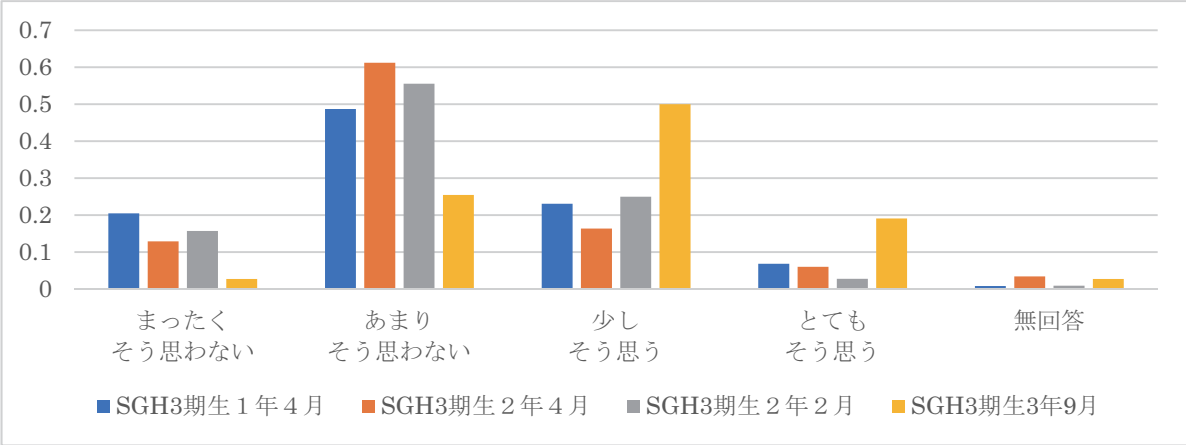


図 IV-8 自分が選択しなかった分野・領域の問題でも議論することができる

b　グローバル課題についての知識に関する変容

図 IV-9 は、SGH3 期生の「国際社会」と「本校の 3 領域（「医療・保健」「防災・減災」「格差・貧困」に関する知識について、その変容を示したものである 2 年 4 月、2 年 2 月、3 年 9 月に行ったアンケート結果を「とてもそう思う」4 点、「少しそう思う」3 点、「あまりそう思わない」2 点、「まったくそう思わない」1 点とし、その平均値で示している。

年を追うごとに平均値が高くなっているものと、2 年 2 月時点でいったん下がっているものがあるが、いずれも 3 年時が最も高くなっている。特に「立場の異なった考えの理解」に関しては、3 年次に大きく伸びており、第 3 学年おいて取り組む「いのちに関する総括論文」への取組が影響している。

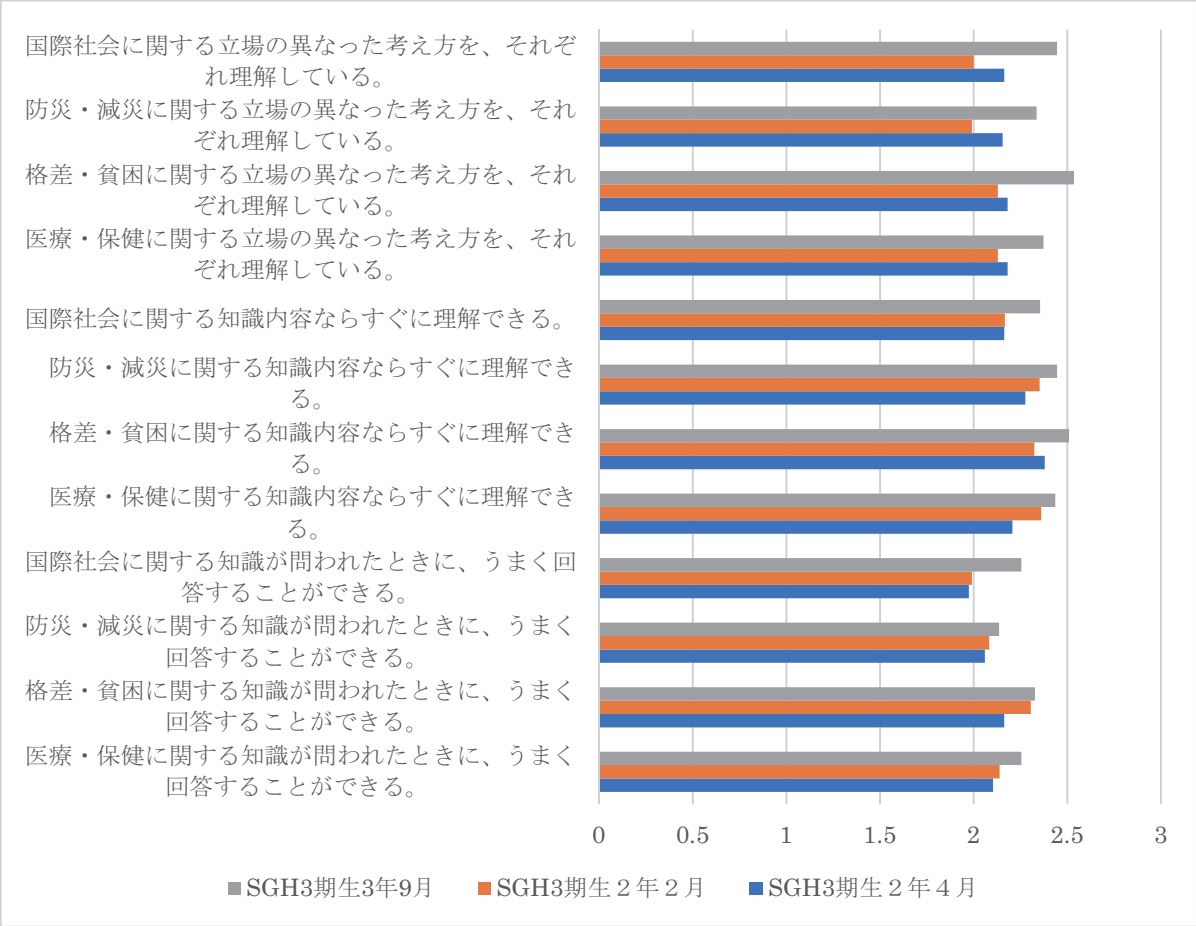


図 IV-9　3 領域と国際社会に関する知識の変容

c　グローバル課題についての課題解決に関する変容

図 IV-10 は、3 つの研究領域だけでなく、さまざまなグローバル課題について具体例や問題点などを説明できるかを問うた結果を示したものである。これも、2 年 4 月、2 年 2 月、3 年 9 月に行ったアンケート結果を「とてもそう思う」4 点、「少しそう思う」3 点、「あまりそう思わない」2 点、「まったくそう思わない」1 点とし、その平均値で示している。

これについても一部の問を除き 3 年時が最も高くなっている。2 年 2 月時点の値が下がっている項目もある。これは、SGH 課題研究発表会に向けて課題研究を進める中で、問題の複雑さや難しさに気付き、表面的な理解から、より深い理解に進んでいく過程でみられる変化とも考えられる。

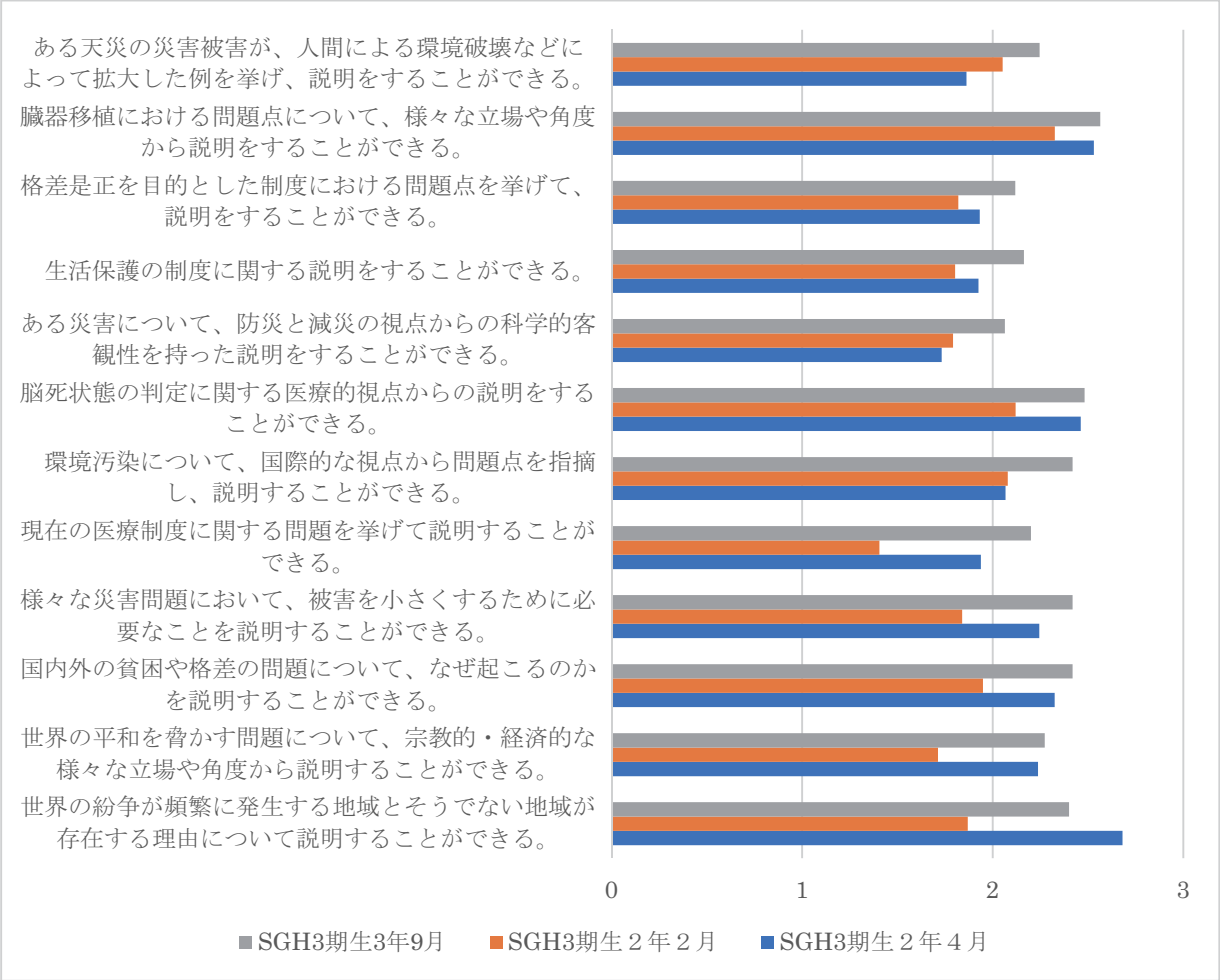


図 IV-10　課題研究で得た知識の活用の変容

３．グローバル・リーダーの新たな評価指標（GPAT）の開発

（１）GPAT について

Global Person Assessment Test(GPAT)とは、グローバル人材に必要な資質能力（特に本校の生徒に身に付けさせたい「4 つの力」）を測定するために、本校で独自作成している評価指標である。これまで本校の生徒や国立大学、私立大学の学生を対象に GPAT パイロット版を実施・分析し、問題の妥当性を証明してきた。（第三年次、第四年次報告書を参照されたい）

GPAT の大きな特徴の 1 つ目は、本来であれば実際の行動を記録し、その行動をもとに評価されるようなコミュニケーション力を、紙面による選択形式の 20 問の問題（P111 参照。「4 つの力」それぞれに対して 5 問ずつ、40 分のテスト）で測定することである。基本的には各問題が 5 点満点で「課題解決力」「多文化理解力」「コミュニケーション力」「セルフマネジメント力」の「4 つの力」の合計 100 点満点の数値で評価をすることができる。

特徴の 2 つ目は、その回答の選択肢に対する点数を、モデル人物による回答傾向から配点することである。GPAT パイロット版では、モデル人物の解答として本校の教員 15 名の回答をもとに傾斜配点をつけていた。しかし、昨年の本校主催の教員研修会において、モデル解答に外部のグローバル人材を加えることで、より分析の妥当性が上がるという意見があり、今年度は企業で働くグローバル人材から協力を得て、25 名の方々（グローバルな企業、新聞社、学習支援団体など）から回答を得ることができた。今年度の GPAT の解答に対する配点はこのグローバ

ル人材 25 名と本校教員 10 名の回答をモデル解答とし、各問題に対する傾斜配点を作成した。

例えば、表 IV-11 は、問 13 のモデル解答の分布と回答に対する配点である。この問題に対するモデル 35 名が最も選んだ回答は回答 4 であったため、この回答を選んだ生徒には 5 点満点が与えられる。ただし、教科の選択問題のように他の選択肢を選んだ生徒は 0 点にはせず、それぞれの回答を選んだ人数分の点数（例えば回答 2 を選んだ生徒には 1.8 点）が与えられる。これは、モデル人材の行動指標（解答）に近い回答をした生徒ほど「4 つの力」が高く、よりグローバル人材の資質があるという仮定のもとに配点し、分析を行っている。

表 IV-11　GPAT 問題に対する傾斜配点の例

	モデル解答の分布	傾斜配点の計算	回答に対する配点
回答 1	2	＝ 5×2/22	0.5
回答 2	8	＝ 5×8/22	1.8
回答 3	1	＝ 5×1/22	0.2
回答 4	22	＝ 5×22/22	5
回答 5	2	＝ 5×2/22	0.5

（２）GPAT による今年度の分析

ａ　SGH 3 期生（3 年生）と SGH 5 期生（1 年生）の比較

第三年次・四年次報告書にも記載したように、GPAT の実施・検証を行ってきたが、今年度は上記の新たな 20 問の GPAT を使い、9 月末に本校の 1 年生（SGH５期生）119 名と 3 年生（SGH3 期生）109 名を対象に実施した。本項ではその分析結果について詳しく述べる。

図 IV-12 は、1 年生と 3 年生の平均点を示したものである。「課題解決力」と「セルフマネジメント力」において有意な差（p<0.05）がみられる。また、合計点の平均では 3.52 点の有意な差（p<0.05）が見られた。これらから、3 年生は、3 年間の SGH カリキュラムを通してグローバル人材に必要な資質能力を習得したといえる。

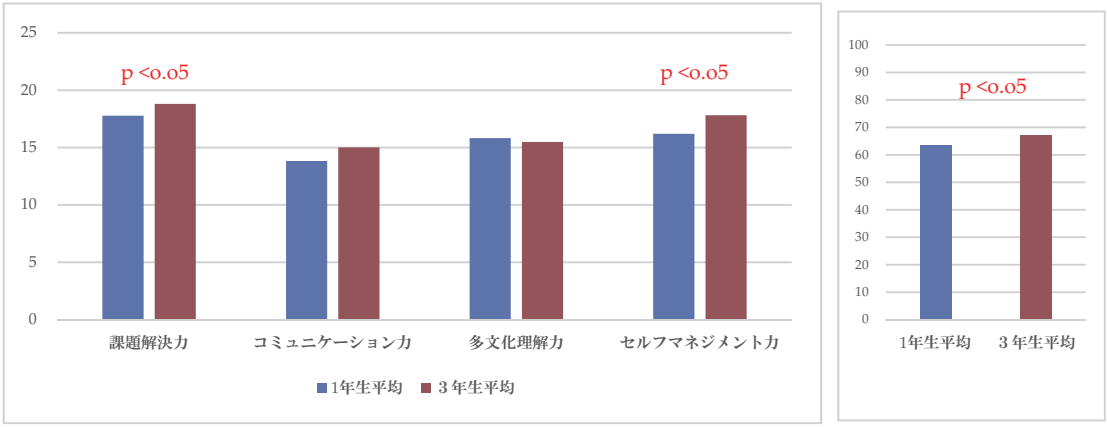


図 IV-12　1 年生（SGH5 期生）と 3 年生（SGH3 期生）の GPAT の平均点の比較

図 IV-13 は、海外短期留学経験者（71 名）と、留学経験がない生徒（157 名）の成績を群間比較したものである。「多文化理解力」「セルフマネジメント力」で有意な差（p<0.05）があり、合計点の平均で 4.27 点の有意な差（p<0.01）が見られた。これらは、海外留学で身に付く力であるが、具体的な数値で有意差が見られたことから GPAT の問題の妥当性が示された結果となった。

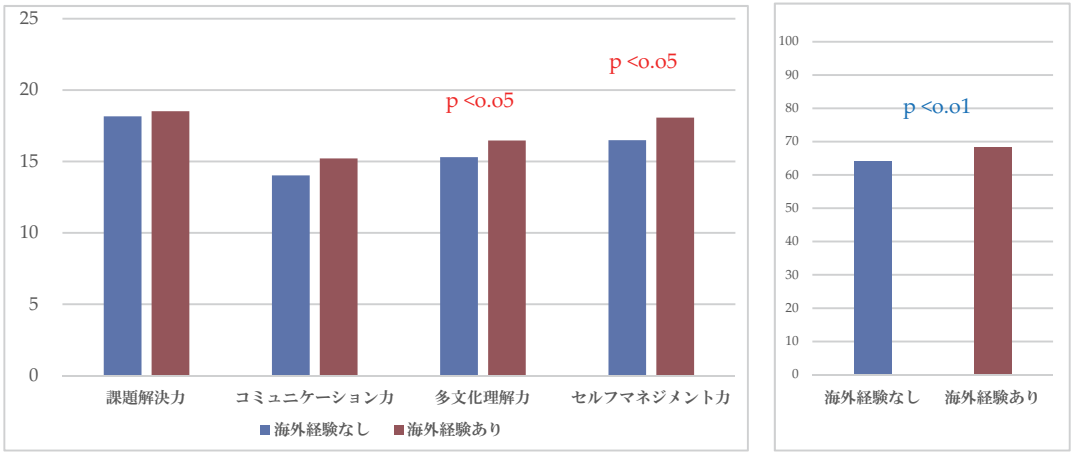


図 IV-13　海外留学経験者とそれ以外の生徒の GPAT の平均点の比較

また、図 IV-14 は、30 名の SGH モデル生徒（校外 SGH 関連活動参加者：「SGH 甲子園」「SGH 英語フォーラム」「SGH 高校生フォーラム」「世界津波の日高校生島サミット」「即興型英語ディベート全国大会・ディベート合宿」「Global Discussion」などに参加した生徒）と、その他の生徒 198 名に分け、群間比較をしたものである。その結果、「コミュニケーション力」「セルフマネジメント力」において有意な差（それぞれ $p<0.01$, $p<0.05$）があり、合計点の平均は 7.19 点の有意な差（$p<0.01$）が見られた。本来は「課題解決力」も有意な差がみられるべきであるが、モデル生徒の人数が 30 名に限られていたため、5%水準の有意差までは示すことができなかったが、「コミュニケーション力」「セルフマネジメント力」については期待通りの有意差が見られた。

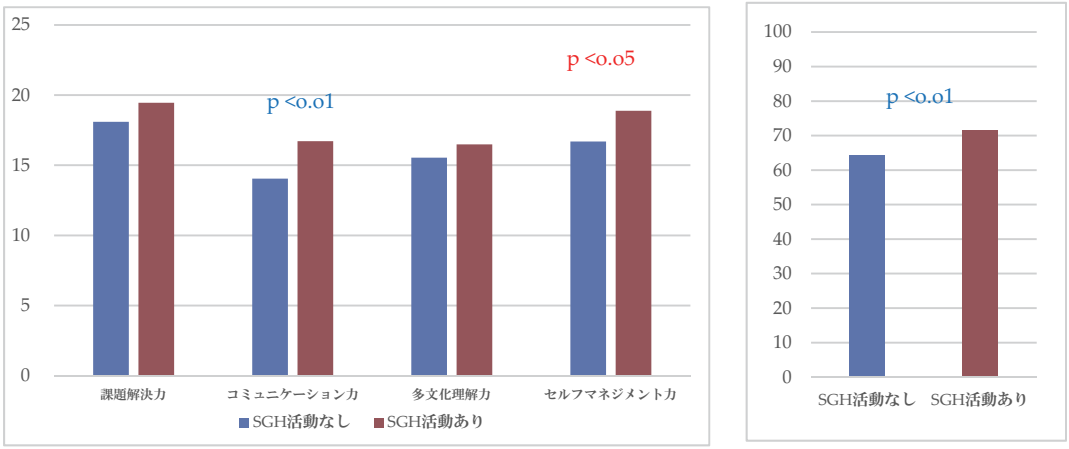


図 IV-14　SGH モデル生徒とそれ以外の生徒の GPAT の平均点の比較

以上の 3 つの群間比較の結果からも、GPAT の問題が多肢選択型のテストでありながら、「4 つの力」を適切に測ることができていると考えている。具体的な群間比較の数値とそれぞれの群間の t 検定の有意水準 p 値に関しては表 IV-15 を参照されたい。

	各力の合計点				合計
	課題解決	コミュ	多文化	セルフ	
１年生(119 人)平均	17.78	13.82	15.83	16.20	63.63
３年生(109 人)平均	18.81	15.02	15.49	17.82	67.15
差	1.029	1.195	-0.332	1.622	3.514
P(T<=t) 両側	0.049	0.067	0.531	0.015	0.021
短期留学未経験者 (157 人)平均	18.16	14.02	15.31	16.49	63.98
留学経験者(71 人)平均	18.52	15.21	16.46	18.06	68.26
差	0.35	1.19	1.16	1.58	4.27
P(T<=t) 両側	0.564	0.092	0.042	0.029	0.009
校内 SGH 活動のみ(198 人)平均	18.09	14.04	15.54	16.69	64.37
校外 SGH 関連活動参加者(30 人)平均	19.46	16.72	16.49	18.88	71.55
差	1.37	2.67	0.95	2.19	7.19
P(T<=t) 両側	0.102	0.005	0.223	0.027	0.001

表 IV-15　群間比較と「4 つの力」の有意差

b　他校との比較

上記 a の分析結果を本年度 11 月に本校で開催した教員研修会で発表し、GPAT の問題を開示した。課題研究の評価指標を広めるため、研修参加校の先生方にそれぞれの学校で GPAT の実施を呼びかけた。ここでは、本校と、実施された 3 つの高校［A 校 56 名（3 年)、B 校 397 名（1 年 249 名、2 年 148 名)、C 校 98 名（1 年 42 名、2 年 33 名、3 年 23 名)］の結果について述べる。

図 VI-16 は本校を含む 4 校の「4 つの力」の平均点を示したものである。また、図 VI-17 は GPAT の合計点の平均点を示したものである。

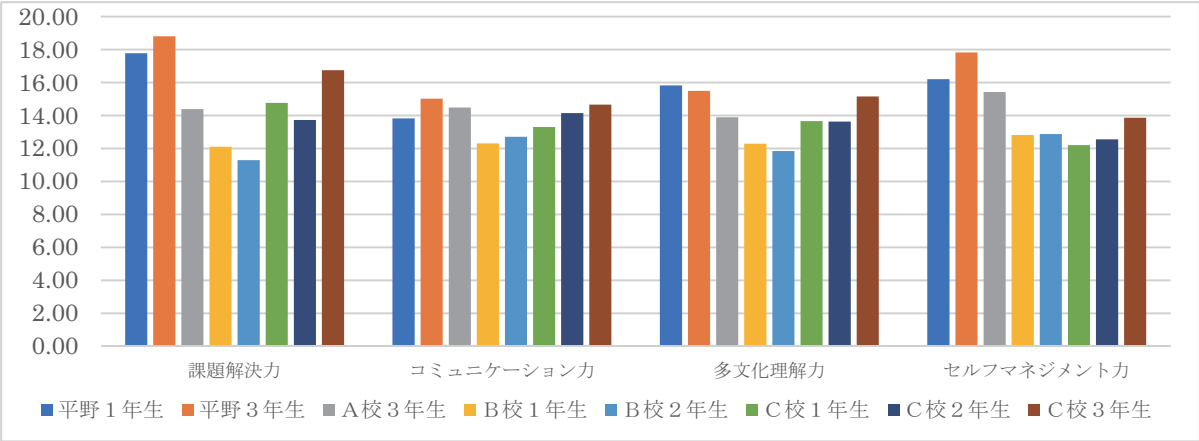


図 IV-16　４校の比較（「４つの力」）

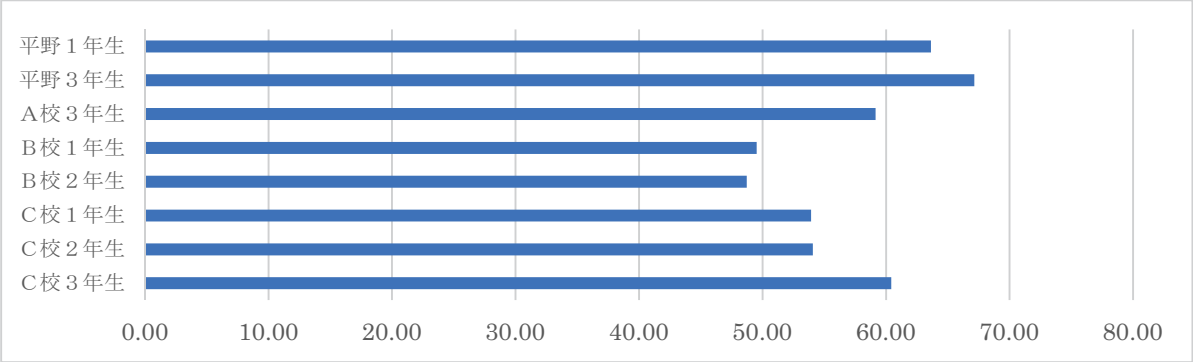


図 IV-17　4 校の比較（GPAT 合計点）

	課題解決力	コミュニケーション力	多文化理解力	セルフマネジメント力	合計
平野１年/Ａ校	3.76	-0.54	2.41	0.91	5.71
	0.000	0.468	0.001	0.300	0.003
平野１年/Ｂ校１年	5.68	1.51	3.53	3.39	14.11
	0.000	0.004	0.000	0.000	0.000
平野１年/Ｂ校２年	6.49	1.12	3.98	3.32	14.92
	0.000	0.053	0.000	0.000	0.000
平野１年/Ｃ校１年	3.01	0.52	2.17	4.00	9.70
	0.000	0.550	0.005	0.000	0.000
平野１年/Ｃ校２年	4.05	-0.32	2.19	3.65	9.57
	0.000	0.715	0.010	0.000	0.000
平野１年/Ｃ校３年	1.03	-0.84	0.67	2.34	3.21
	0.299	0.427	0.484	0.049	0.232

表 IV-18　平野 1 年生と他校の比較（有意差）

	課題解決力	コミュニケーション力	多文化理解力	セルフマネジメント力	合計
平野３年/A 校	4.79	0.66	2.08	2.54	9.23
	0.000	0.436	0.003	0.007	0.000
平野３年/Ｂ校１年	6.71	2.71	3.20	5.01	17.63
	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
平野３年/Ｂ校２年	7.52	2.31	3.65	4.95	18.43
	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
平野３年/Ｃ校１年	4.04	1.72	1.84	5.62	13.22
	0.000	0.085	0.015	0.000	0.000
平野３年/Ｃ校２年	5.08	0.87	1.86	5.27	13.08
	0.000	0.397	0.025	0.000	0.000
平野３年/Ｃ校３年	2.06	0.36	0.34	3.96	6.73
	0.051	0.771	0.717	0.002	0.026

表 IV-19　平野 3 年生と他校の比較（有意差）

c　GPAT のまとめと今後の取組

今年度は、GPAT の大きな課題であったモデルアンサーの質の向上と他校への実施・分析について成果を上げることができた。今後、問題の質と量を向上させることは言うまでもないが、この問題を他校に広め、比較分析を進めることで、高校生の資質能力の分析やカリキュラムの効果測定を進めたい。

４．保護者アンケートの結果

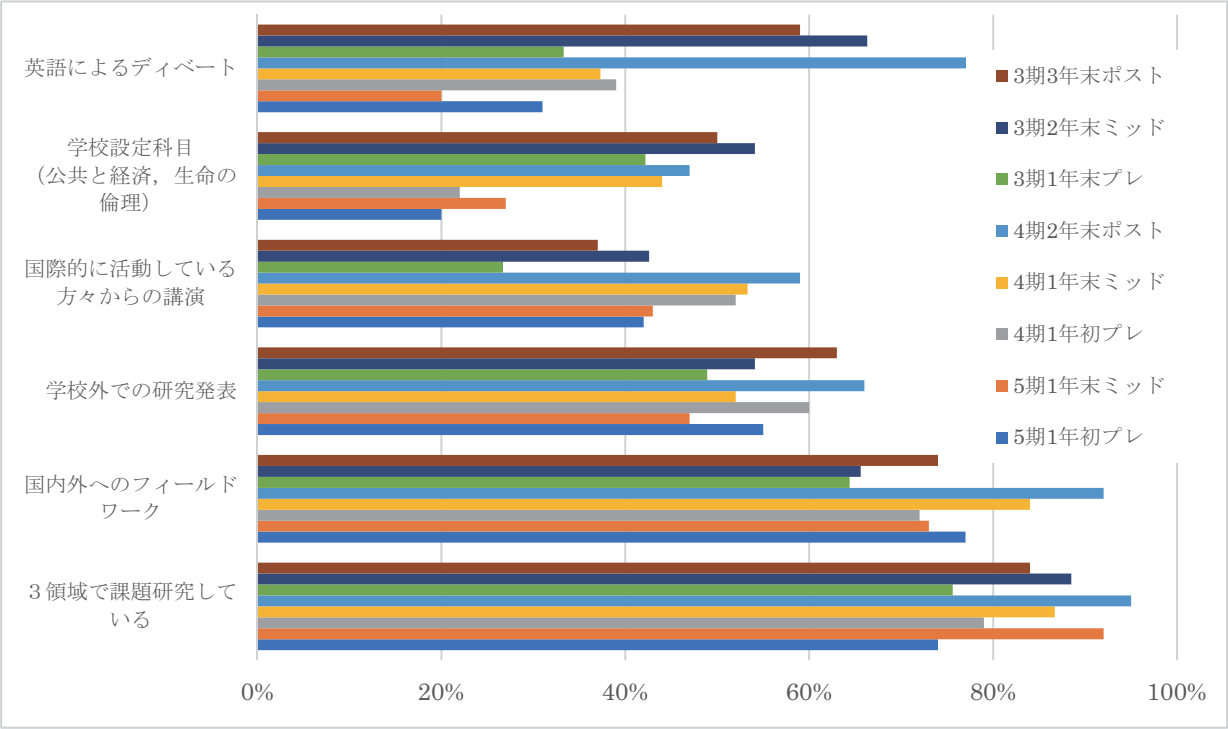
保護者に対して実施したアンケートの結果について報告する。アンケート実施時期と回収数を表Ⅳ-6 に示す。

	SGH 5 期生(1 年)	SGH 4 期生(2 年)	SGH 3 期生(3 年)
プレ	2019 年 5 月(99)	2018 年 5 月(80)	2018 年 2 月(45)
ミッド	2020 年 1 月(49)	2019 年 2 月(75)	2019 年 2 月(61)
ポスト	－	2020 年 1 月(59)	2019 年 12 月(68)

表Ⅳ-20　調査時期および回答数　　（　）は回収数

（１）　SGH 活動についての認知

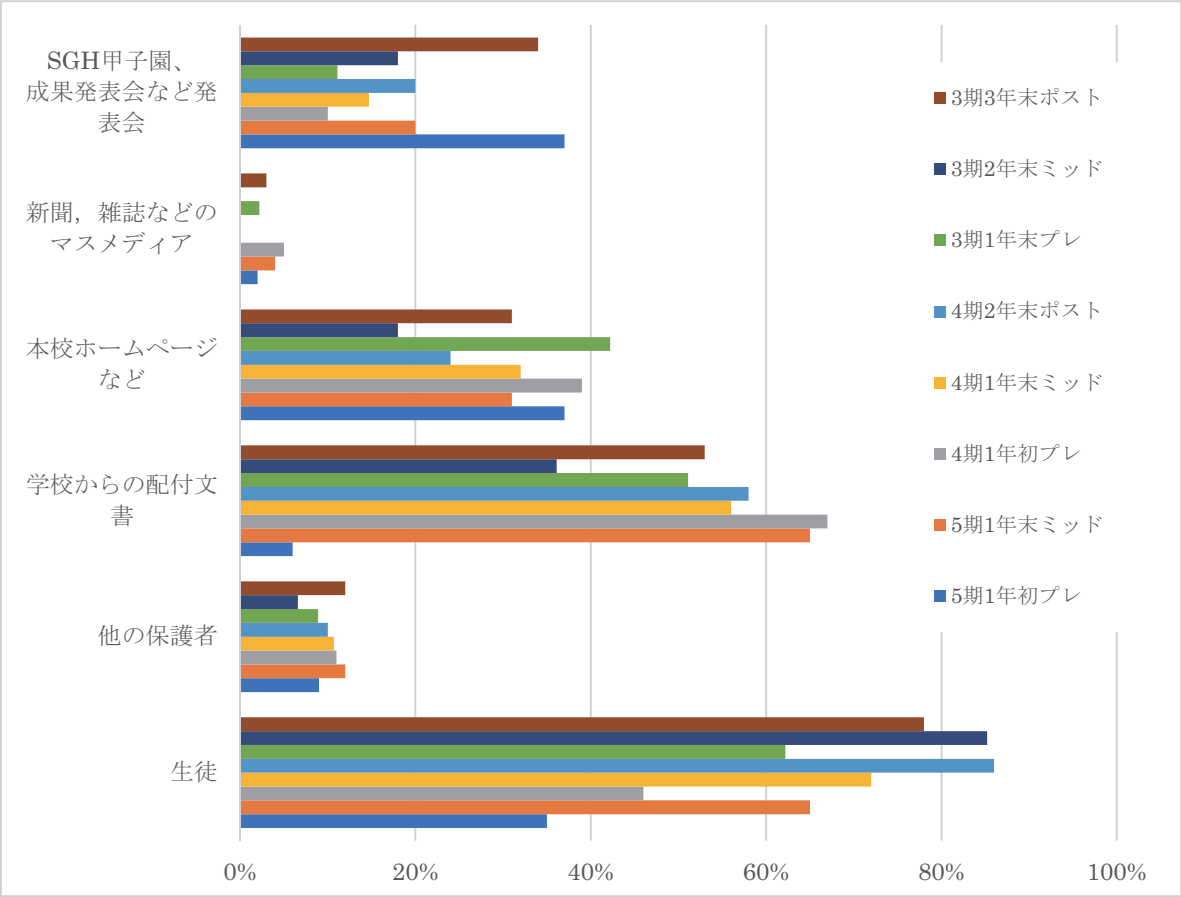
図Ⅳ-21 のグラフが表すように、どの学年とも、3 つの研究領域に分かれた課題研究と国内外へのフィールドワークに関しての認知度が高かった。学内での講演や学校設定科目に関する認知度が他より低かった。



図Ⅳ-21　SGH 活動の認知度

（２）SGH 活動に関わる情報の入手

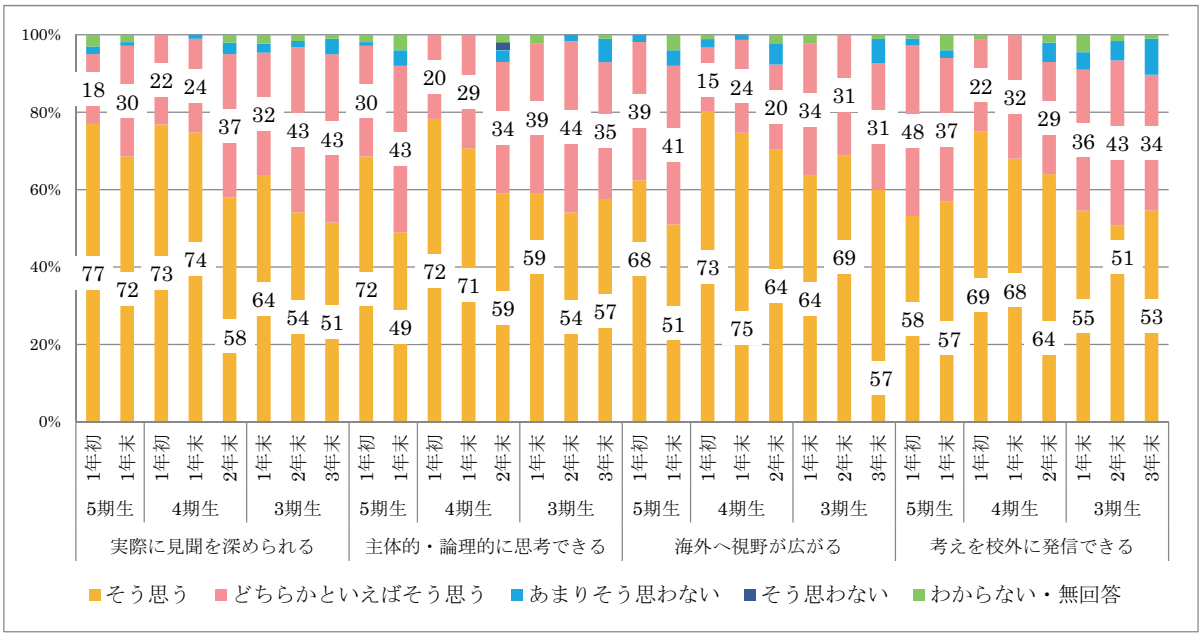
図Ⅳ-22 から、保護者は本校生とのやり取りの中から、SGH の活動の情報を得ていることがわかる。また、学校からの配布物が学校の教育状況を伝える大きな役割を担っていることがわかる。一方、ホームページや発表会を通した情報提供をさらに充実させる必要があることがわかった。



図Ⅳ-22　SGH に関する情報の入手

（３）SGH プログラムについての捉え方

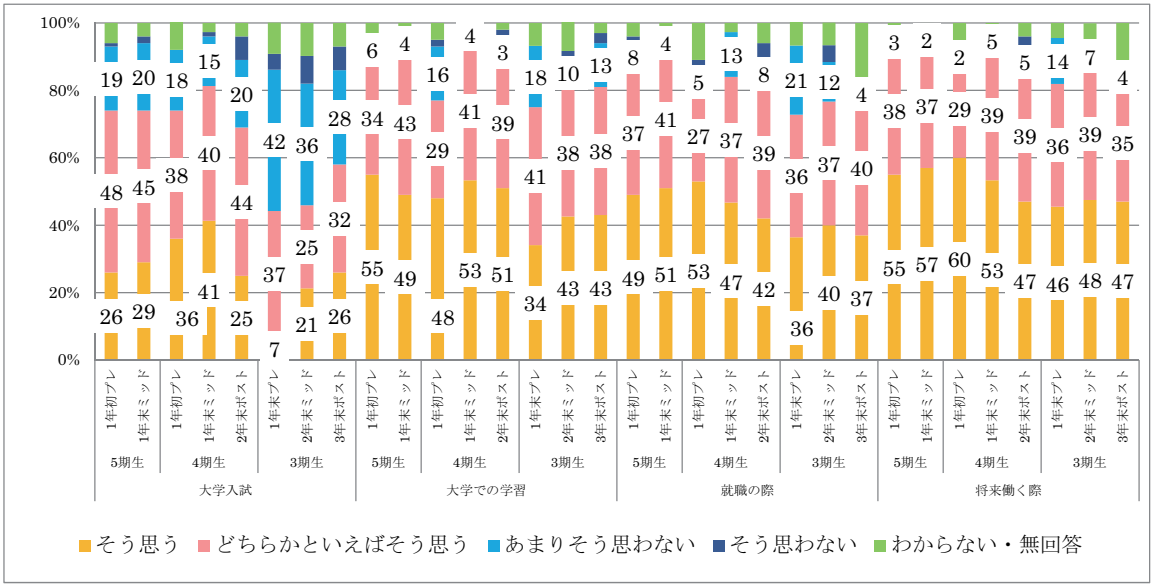
図Ⅳ-23 に示すように、いずれの項目も「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が 90%以上と高い割合を占めている。本校の教育内容と意義について、保護者の理解が得られていると考えられる。



図Ⅳ-23　SGH プログラムについての捉え方

（４）SGH プログラムで得た経験が役立つか

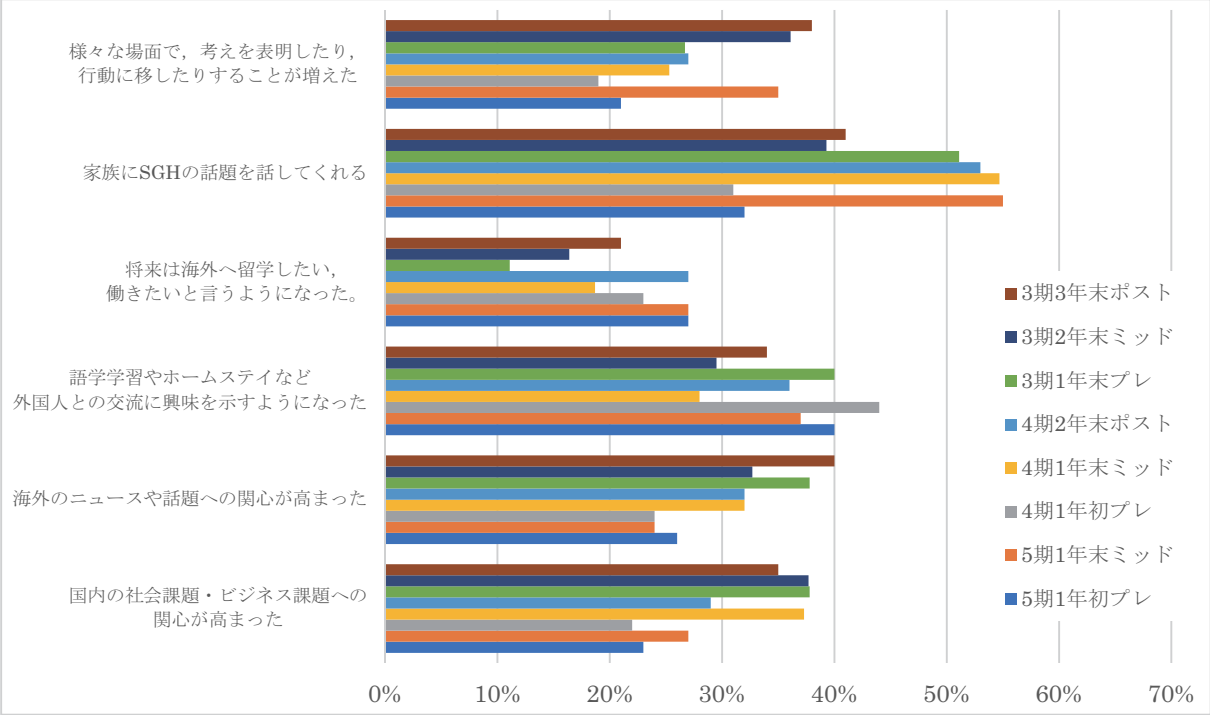
この質問に対しては、図Ⅳ-24 の通り、すべての項目で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という肯定的な意見が多い。「大学での学習」「就職の際」「将来働く際」の３項目では肯定的な回答が 70%以上であったが、「大学入試」の項目については、支持する割合が比較的低かった。



図Ⅳ-24　SGH プログラムで得た経験はどこで役に立つか

（５）生徒のようす

図Ⅳ-25 に示すように、どの学年でも家庭内での SGH に関する情報の共有が活発に行われている。この生徒との情報共有の活発さが、本校でのプログラムやその教育内容に対する保護者の高い理解を示している。また、海外での学習機会や国内外での出来事への関心も高まっている。探究活動を通じて、多様な物事に興味を持つ観点が身についてきたと考えられる。



図Ⅳ-25　生徒の変容

（６）その他自由記述による回答

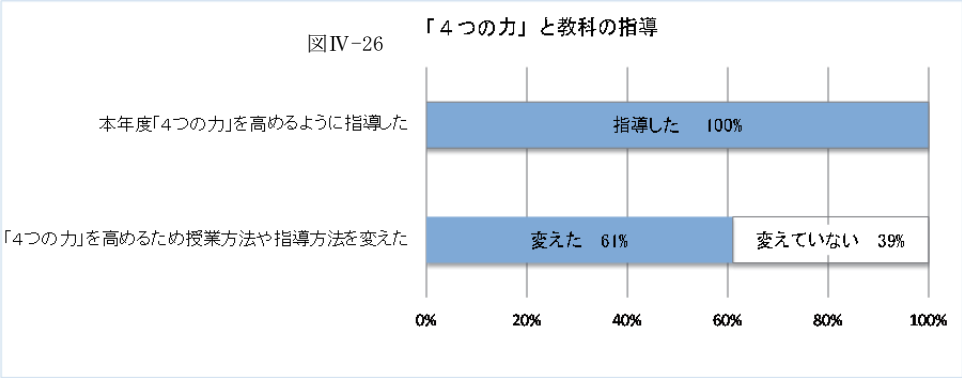
今年度末のアンケートの回答から記述する。3 年間を通して、探究活動を行なってきた 3 年生（SGH3 期生）の保護者からは、「SGH のプログラムを通じて実践的に学べた」や「発表の成果を見て、子どもが成長していることを大変嬉しく感じている」等の継続的な SGH のプログラムに対する肯定的な評価をいただいた。

2 年生（4 期生）、1 年生（5 期生）の保護者からは、「主体的に学習・調査・発表する姿が見られた」や「課題解決に取り組む中で試行錯誤し、広い視野で世間を見ることができるようになった」等の肯定的な意見が多かった。自ら考え、行動する子ども達を見て、今後の成長への期待が多くみられた。

５．本校教員アンケートの結果

SGH カリキュラムを通して育成したい「4 つの力」と教員の指導について、教員対象のアンケートを行った。『教科指導において、「4 つの力」が伸びるような指導を行ったことがあるか』という問いに対して、100%が「ある」と回答した。

また、『「4 つの力」を伸ばすことを目的として授業や指導法を変化させたか』という問いに対しては 61%が肯定的に回答している（図Ⅳ-26）。昨年度も同様の傾向があり，課題研究だけでなく教科指導においても意識的な指導が行われている。



図Ⅳ-26

以下に、教員が記載した具体的な指導内容の例を記載する。なお、いずれも「4 つの力」に寄与するものであると考えられるが、指導によって育成が期待される力は明確に分類できなかったり、複数にわたっていたりすることを留意されたい。

[グループワーク等の活動]
・ディベート形式や、グループでの課題発表、意見の集約、クラス全員の前での発表など
・動画や他の人の発表を聞いた後、さらにグループワークを行い活性化を図る
[他国に関する教材による活動]
・映像を鑑賞し、コメントシートやレポートを作成する
・異文化との関わりを論じた現代評論を読む
[情報から判断する活動]
・講演、生徒の発表、データ等から情報を集め自分の意見をまとめる
・新聞の紙面構成を知り興味のある記事を探し、その内容をグループ内で発表する

これらは教科指導に関する指導例のみであり、紙面の都合上その全てではない。全教員には、本校の SGH カリキュラムを通して伸ばすべき「4 つの力」が共通に認識されており、教科指導の内容が自然と生徒中心の授業へと変容していっている。また昨年度と比較すると、海外の諸国に関する教材を活用した記載が多くみられ、海外研修旅行や海外 FW なども教科指導と関連させている場面が増加している。

６．教員研修・交流会の成果と課題

平成 28 年度より、教員交流・研修会を開催している。28 年度は 39 名が、平成 29 年度は 64 名が、平成 30 年度は 65 名が参加し高い評価を得た。本年度は、11 月 9 日（土）に同会を実施し 69 名が参加した。以下に、本年度実施した教員交流・研修会について報告する。

（１）実施目的

1）課題研究の指導・評価のために開発・実践している「平野メソッド」を紹介し、成果の還元を図るとともに、参加者から意見を得て今後の改善に役立てる。
2）教科指導と課題研究の往還として実践報告し成果の還元を図るとともに、参加者から意見を得て今後の改善に役立てる。
3)「平野メソッド」をローカライズする方法を紹介することで、「平野メソッド」をより汎用性のあるツールとして活用できるようにする。
4）参加者のネットワークを構築して今後の情報交換の基盤づくりを進め、SGH 校だけでなく広く学校関係者間の連携拠点としての役割を果たす。

（２）日時・参会者

日時：令和元年 11 月 9 日（土）10:30～14:15
会場：大阪教育大学附属高等学校平野校舎　多目的ホール
参加者数：69 名
参加者：
運営指導委員　立命館大学　田中博准教授
本校アドバイザー　大阪教育大学　伊藤敏雄理事・副学長、大阪教育大学　片桐昌直科学教育センター長、大阪教育大学　鈴木真由子教授、学校評議員　大阪成蹊大学　丸野亨准教授
来賓：
大阪教育大学　河村勝行学術部長、大阪教育大学　新津勝二理事
大阪教育大学　八田幸恵准教授
参加者所属（学校関係者。順不同）：
大阪教育大学、大阪教育大学連合教職大学院、大阪市立大学、相愛大学、大阪府立柴島高等学校、大阪府立渋谷高等学校、大阪府立豊中高等学校、大阪府立東百舌鳥高等学校、大阪府立平野高等学校、大阪府立茨田高等学校、大阪府立八尾高等学校、大阪府立夕陽丘高等学校、大阪市立中央高等学校、大阪市立南高等学校、奈良県立西和清陵高等学校、京都府立亀岡高等学校、福井県立敦賀高等学校、鳥取県立八頭高等学校、大阪信愛学院、帝塚山学院高等学校、香里ヌーヴェール学院、聖心学園中等教育学校、神戸山手女子中学校高等学校、日本福祉大学付属高等学校、愛知県時習館高等学校、国際基督教大学高校、創価高校、公文国際学園、神奈川学園中学高等学校、広島女学院中学高等学校、関西創価中学校高等学校、香芝市立香芝東中学校、尼崎市立日新中学校、金蘭会高等学校中学校、高石市立高南中学校、大阪市立長吉西中学校、(株)啓林館

（３）教員交流会当日の流れ

ａ　第一部

「平野メソッドを活用した教科指導のあり方及びグローバル人材評価の開発」

①「平野メソッド」の開発について　（本校教諭　山﨑勝載）

SGH 指定校となり「平野メソッド」を作り上げるに至った経緯について説明した。

生徒に身につけさせるべき「4 つの力」を整理することで、グローバル人材育成に繋げていること、学習内容と方法を整理することで共通理解を持ち、他の学習活動に転用していくことができることを説明した。「平野メソッド」のターゲットは課題研究だけでなく、探究学習をきっかけに教科指導や評価法の一体改革、進路指導や教員養成や教員研修自体の変革も視野に入れたものである。

②「平野メソッド」を活用した教科指導の事例

「平野メソッド」は、課題研究において活用できるツールであるとともに教科学習においても活用でいるツールであることについて説明した。英語科および世界史での活用事例を発表した。

ⅰ）英語「三角ロジックを活用した TOEFL iBT writing 指導」（本校教諭　英語科　福好功伸）

「平野メソッド」の１つである「三角ロジック」を活用し、「より高度な、まとまりのある英文」を書けることを目指すべき生徒の姿として授業実践してきた。題材は TOEFL iBT の independent task を利用し、エッセイライティングを生徒に課した。自身の意見を書き始める前に文構成の設計図を「三角ロジック」を活用し、作成することを前提とした。授業では、共通の間違いや改善点を授業で共有し、同トピックでのスピーキング活動や Peer-editing で、論理構成・表現方法・理由付けの共有を図った。実践結果として、自身で評価できる視点・文章構成力等の向上が見られた。生徒アンケートからも、英文を書く機会の増加や物事に対する観点の多様化、表現力の向上など肯定的な意見が多数見られた。

ⅱ）世界史 A「“三角ロジック”を活用した世界史における主体的な学び」

（本校教諭　地歴公民科　熊原真史）

歴史授業において、史資料の活用は重要な役割をもっている。また教科書に記載されている内容を深く理解するためには、史資料に立ち返り、考証することが大切である。生徒がこの考証を興味深く行うことが、主体的に学ぶことに繋がると考えた。今回の実践では、その史資料の読み解きで、より論理的な展開がなされるように「平野メソッド」でも取り上げている「三角ロジック」を活用させた。具体的には、イタリアの統一運動で活躍した人物の貢献度を、グループに分かれ、史資料（根拠）を用いて、内容を精査し（論拠）、論理的にまとめさせた（主張）。深い学びの実践としては、改善の余地を残すこととなったが、生徒のアンケートから「4 つの力」の育成に寄与する実践になった。

③グローバル人材の評価（GPAT）の開発　　（本校教諭　宇野公貴・武部俊輔）

評価開発が取り組んでいる本校独自のグローバル人材の評価システム（GPAT）についての説明を行った。昨年の GPAT の課題はテスト問題とモデル回答の妥当性であったが、今年度の GPAT では問題精製を行い、モデル回答に企業で働いているグローバル人材 25 名と本校教員 10 名の回答を用いることで改善された。また、配点も「4 つの力」それぞれに対して 25 点ずつにし、客観的な評価ができるようになった。今回の発表では、上記の今年度版 GPAT を使い、本校の 1 年生、3 年生対象に実施・分析を行った。1 年生と 3 年生の間では、「課題解決力」「セルフマネジメント力」において有意差があった。また、短期海外留学経験者とそれ以外の生徒の間では、「多文化理解力」「セルフマネジメント力」、校外での課題研究発表を経験した生徒とそれ以外の生徒の間では、「コミュニケーション力」「セルフマネジメント力」において有意差が見られた。これらの結果から、GPAT の問題・モデル回答の妥当性を示すことができた。GPAT の分析結果の発表後、参会者に GPAT の問題例を配布し、問題の狙いや改善すべき点などを小グループで話し合っていただいた。このようなワークショップは、参会された先生方のそれぞれの学校で本校の GPAT のような独自の問題を作る手助けになると思われる。GPAT の目的の一つは、他校にもこの評価指標を広げることであるため、参会された先生方の学校でも GPAT を実施していた

だけないかとお願いをした。その結果、3 つの学校から GPAT 実施の依頼をうけ、後日実施していただき、本校生徒と比較・分析した。その結果に関しては、第 4 章を参照されたい。

b　第二部

「平野メソッド」を活用した課題研究の進め方　～　すべてみせます課題研究の指導方法　～」

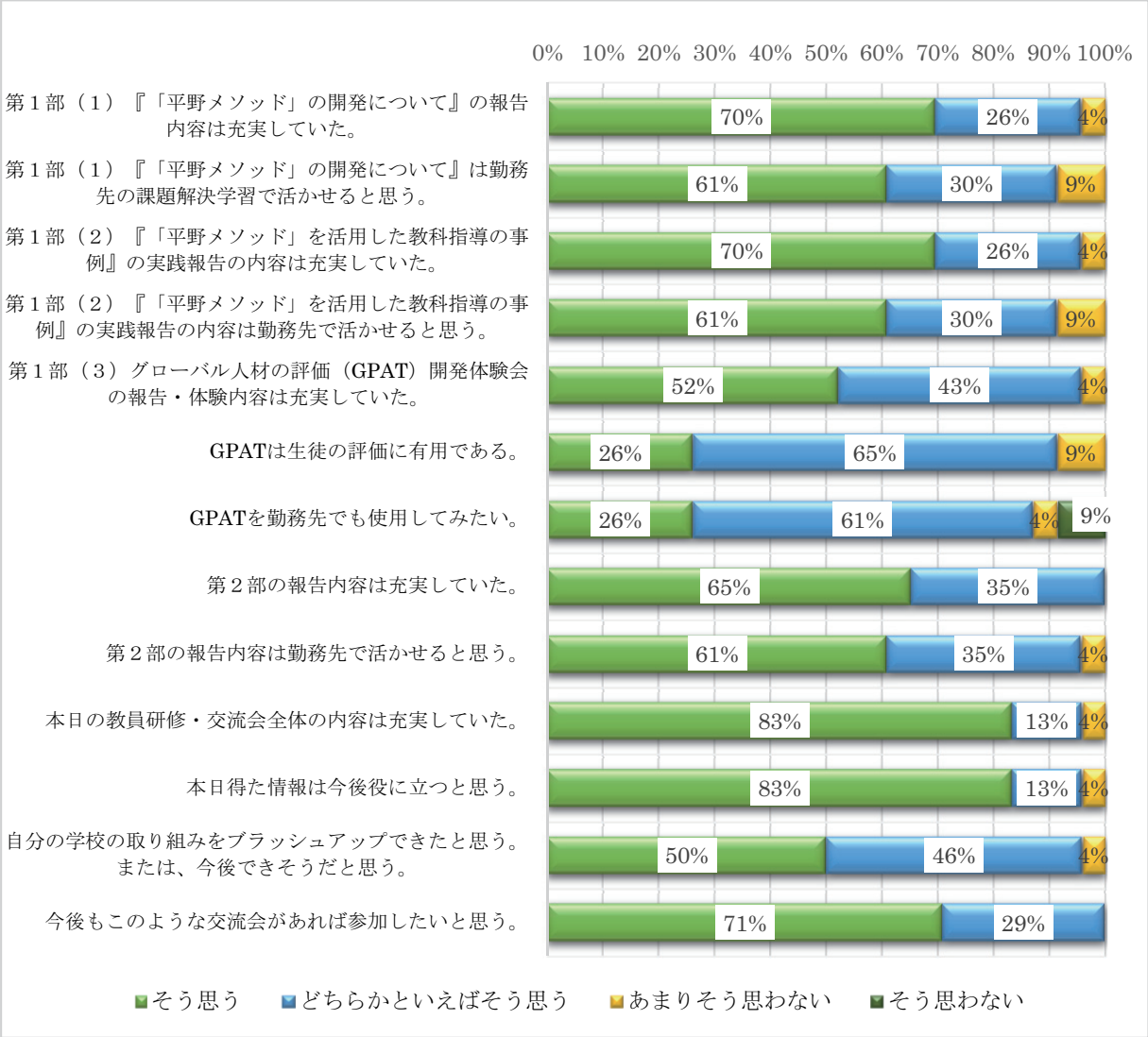
（47 期生 SGH チーム代表；日比紀孝　鏑木昌博）

午前中は 47 期生の口頭発表とポスター発表を見学してもらっており、ここでは、入学時からこの日の発表に至るまでの 2 年間における学習指導の過程とそのなかで開発したツールについて報告した。

本校では学年団を中心に課題研究を担当しており、課題研究の進め方については前年度の「SGH カレンダー」や「前年度の報告書」を参照しながら実施している。ここでの発表は本校 47 期生が 2 年間で積み重ねた資料「47 期生 1 年間のあゆみ（1 年次の資料集）」と「47 期生これまでのあゆみ（2 年次における発表当日までの資料集）」を示しながら説明し、質問を受け付けた。

（4）教員研修・情報交換会参加者へのアンケート結果

教員研修・情報交換会終了後、参加者にアンケート調査を行った。多岐選択型の各項目の結果は図Ⅳ-27 に示し、自由記述型の各項目に対する結果を要約し、次に示す。



図Ⅳ-27　教員研修・情報交換会参加者へのアンケート項目・結果

①第１部についての感想をお聞かせください。

［「平野メソッドを活用した教科指導のあり方及びグローバル人材の評価の開発」について］

・冊子、本の形式のもの、どれも充実した資料であった。
・体系的にカリキュラムを作られていて感動した。これも５年間の先生方の試行錯誤の結果だと思う。本校での課題研究の実践で、ぜひ真似させていただきたい。
・理論的なことから実際の根本まで多くのことをご教示頂き、勉強になった。
・三角メソッドの活用を軸にカリキュラムマネジメントしていることがよくわかった。
・「平野メソッド」が少しずつアレンジできる、完成版になっていないというところが、全校のものになる力があり、他校でも活かせそうだと思える良さだと思った。
・平野メソッドを全教員で理解→アレンジして行う→授業にも活かしていく、という流れができているところが素晴らしい。
・実際の教科への応用の話は、学校に紹介するのに参考になった。
・評価の話は興味深かった。

②第２部についての感想をお聞かせください。

［「平野メソッドを活用した課題研究の進め方
～すべてみせます課題研究の指導方法～」について］

・具体的なワークシートとともに、丁寧にお話しいただき、勤務校でも真似しようと思った。
・年間を通してどのような動きをされたのかが、よくわかった。
・貴校の教員集団のまとまり、一体感、勢いを全体を通して感じた。
・最前線で試行錯誤しながら、対応されている若い教員の先生の話が聞けてよかった。目標に向けて、教員が本気になるかどうかにかかっていると思った。
・それぞれの項目が知れてよかった。

③課題研究を指導している上（もしくは、今後指導する予定）でお困りのことや不安なことを教えてください。

・問いの設定、興味関心の持続をどのようにするか
・文献調査に重きを置く、人文科学分野での課題研究の進め方
・生徒のモチベーションが続かない
・今年メソッドを参考にさせてもらいながらスタートをしているが、調べ学習の領域を抜け出せない
・評価をどうするか、教科や他の総合学習（平和・人権・進路）とどう関連付けるか、時間数の制限
・評価方法・学年間の系統性
・通常カリキュラムとの両立
・テーマ設定、生徒のモチベーションの向上、評価など、多々あるが、困難・不安を丸ごと飲み込んで楽しんでこその課題研究・探究学習だと思う
・教科での導入、それを行うことでの進度の遅れ

④今後このような教員研修会・交流会があれば、どのような内容を聞きたい(話し合いたい)ですか。

・進路・進学とのバランス、授業(教科)との関連
・知識もある程度つけさせ、学力保証をしつつも、探究的要素をどのように各教科に取り入れるか
・学内でのコンセンサスのつくり方
・他の仕事との量のバランスをどのようにとっているか
・教育大附属高校ならではの実践
・効果的な「問い」のあり方
・「課題研究」が各教科の授業にどう活かされているのか、他の教科の実践事例
・実際に授業の様子(発表ではなく指導)が観られる会(授業公開)
・この研修会を受けて、他校でうまくアレンジされている例

本年度の参加者のうち、前回（2018 年 11 月）・前々回（2017 年 12 月）の交流会から継続して参加された人数のアンケートをとった。回答を頂いた人数として、“2017 年 12 月（前々回）、2018 年 11 月（前回）両方の交流会に参加した”が 0 名、“2017 年 12 月（前々回）の交流会にのみ参加した”が 2 名、“2018 年 11 月（前回）の交流会にのみ参加した”が 2 名、“今回、平野の教員交流会に初めて参加した”が 20 名であった。

更に、前回の交流会に参加してくださった方には「探究的な学習の指導法・学習ツール」「教科指導と課題研究の往還」「グローバル人材評価システムの開発」を受け、教育活動・課題研究の指導の変化の有無についてのアンケートを行った。4 名からの回答があり、4 名とも変化があったとの回答であった。また、変化の内容については 2 名から回答を頂いた。回答を以下に示す。

・ツールを活用し、共通のフォーマットを使用して取り組みを開始した。
・三角ロジック、QFT を授業で少し取り入れた

（５）教員研修・情報交換会のまとめ

今年度の教員研修・情報交換会では、昨年度の SGH の成果（指導法・評価）の報告だけに留まらず、「平野メソッドの活用」をテーマに、教科指導のあり方および課題研究の進め方の報告を行った。参加者アンケートから、今回の教員研修・情報交換会に対して、96％の割合で肯定的な回答を得ることができた。また 96％の方に、今後役立つ情報を得ることができたと回答して頂いた。

今年度の第一部の教員研修は『「平野メソッド」の開発について』、『「平野メソッド」を活用した教科指導の事例』、『グローバル人材の評価（GPAT）開発体験会』の三部構成となっていた。

『「平野メソッド」の開発について』の充実度に関しては、96％の割合で肯定的な回答を得られた。また 91％が、実践報告の内容は勤務先で活かせると思う、と回答しており、他校への汎用性がある取り組みの報告だったと考える。『「平野メソッド」を活用した教科指導の事例』の充実度に関しては、96％の割合で肯定的な回答を得られた。各教科で SGH を意識した授業を行っていることに一定の評価を得られたと考える。しかし、この内容を勤務先で活かせるか、との質問では、9％が否定的な回答している。モデル校として、他校での活用を意識した授業作りが必要であると考えさせられた。『グローバル人材の評価（GPAT）開発体験会』の充実度に関しては、96％の割合で肯定的な回答を得られた。評価の必要性とその手法については、アンケー

トからも評価を得られたと考える。しかし本校が作成する GPAT に関しては、完成された際に勤務先でも使用してみたいか、との質問に対して、13%が否定的な回答となった。実際に GPAT を使用し、SGH による生徒の変容を詳細に評価できるのか、妥当性を上げるため引き続き検証を行いたい。またモデル人材の違いによる GPAT の回答の差異や、質問内容の精査と改編を引き続き行いたい。

昨年同様、第二部の情報交換会や自由記述アンケートから、多くの参加者が現場で課題を抱えていることが分かった。今年度多く挙げられた課題としては、教員間の意識改革・組織化と生徒の興味関心やモチベーションの向上についてであった。複数の学校現場で、共通の課題を抱えている場合が多く、次年度以降、その解決に繋がる取り組みを行っていく必要を感じた。また教員研修・情報交換会に望む声として、“平野メソッド”の変遷と、どう教科の授業に活かしていくのかという内容が多かった。今後もこれらを昇華した形で発信できることを目指したい。今年度も前回の交流会に引き続き、今後もこのような交流会があれば参加したいと思うか、との質問に対しては、参加者の 100%から肯定的な回答を頂いた。次年度以降も課題研究指導法の発信の拠点校として、その役割を果たすことに尽力したい。

（６）教員研修・情報交換会参加者の成果と課題

今年度の教員研修・情報交換会では、5 年間の集大成として「平野メソッド」のローカライズ版「47 期生 1 年間のあゆみ（1 年次の資料集）」と「47 期生これまでのあゆみ（2 年次における発表当日までの資料集）」を示すことができた。「平野メソッド」は課題研究における基本ツールであり、各学校や学年でローカライズすることが必要となる。今年度は、そのことについて具体的な資料を示しながらローカライズの必要性やその方法などについて発表することができた。

発表時間が短かったことが課題としてあげられる。

グローバル人材評価テスト（GPAT）2019 年度版

以下の質問[1] ～ [20]において、最も適当だと思う答えをマークシートに記入してください。なお、問題文に出てくる「課題研究」とは「グローバルな社会問題を高校生・大学生が探求的に学習し、解決することを目的とした研究」を意味する。

[1]

あなたのチームは課題研究で、大規模災害発生時に救助活動をする人が災害に巻き込まれる２次災害があるということを知り、ロボットを被災地で活用することが減災に役に立つのではないかと考えました。研究を進めるにつれて、ロボットの活用のためには災害時の電源確保に課題があることが分かりました、普段から太陽光発電などの自然エネルギーが普及していればロボットの活用も広がるという仮説を立て、検証を行いました。この研究内容をポスターで発表する際、主題・副題としてふさわしいと考えられるのはどれか。①～⑤の中から１つ選びなさい。

（例）　主題　～副題～

①　２次災害の研究　～ロボットを活用する減災～
②　ロボットは減災に役立つか　～自然エネルギーの普及で広がる活躍の場～
③　災害時の電源確保問題を考える　～自然エネルギーの普及がカギ～
④　ロボットが活躍する減災　～２次災害の減少を目指して～
⑤　２次災害を減らすには　～ロボットを活用する減災～

[2]

以下の文章は、ある研究に関する研究背景を示したものである。文章を読んで、以下の設問に最も適当だと思う答えを選びなさい。

うつ病は 20～25 歳の男女に初めて発症することが多い、気分障害の一種であり、食欲低下、不眠などを引き起こす精神障害である。うつ病の発症には脳内物質セロトニンの抑制が原因の一つとして考えられ、選択型セロトニンの再取り込み阻害剤(SSRI)を服用し、脳内のセロトニン濃度を上げることによって、うつ病の症状が軽減することがわかっています。また、薬剤だけでなく、脳内のセロトニンの活動を活性化させるためには、太陽光を浴びることや、体を動かすこと、生活リズムを改善することなどが重要だと言われています。あなたはこれらの情報を元に、サッカーをすることがうつ病に効果があるという仮説を立て、研究を行いました。

1) この研究において、サッカーがうつ病に効果があるという仮説の根拠は何ですか。その根拠として重要だと思うものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① サッカーをすることで体を動かすから
② サッカーをすることで太陽光を浴びるから
③ サッカーをすることで生活リズムが改善されるから
④ サッカーを部活などで行う 10 代ではうつ病が少ないから
⑤ サッカーをすることでセロトニン濃度を上げることができるから

2) 上記の仮説を検証するために、ある病院のうつ病の患者を２つの群（α群とβ群）に分けて実験を行いました。群の分け方としてもっとも適当だと思う組み合わせを後の①～⑤の中から１つ選びなさい。

A）a 全年齢の　　b 若年層の
B）a サッカー経験のある　　b サッカー経験のない　　c サッカーの経験に関わらず
C）a 男性のみ　　b 女性のみ　　c 男女混合（1:1）
D）a 屋内でサッカー　　b 屋外でサッカー　　c 屋外で日光浴　　d 屋内で休憩
　　e 何もしない　　＊D)の a～d については週１回、１時間行うものとする。

①

	A	B	C	D
α群	a	c	a	a
β群	a	c	a	d

②

	A	B	C	D
α群	b	b	b	a
β群	b	b	b	b

③

	A	B	C	D
α群	b	a	c	b
β群	b	b	c	e

④

	A	B	C	D
α群	a	b	c	b
β群	a	b	c	c

⑤

	A	B	C	D
α群	a	b	a	b
β群	a	b	a	c

3) 2)の比較研究の結果、仮説を立証する結果が得られなかった場合、その理由として考えられると思うものを、次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① うつ病は別の脳内物質に効果があるから　② セロトニンの活性化はうつ病に効果がないから
③ サッカーではセロトニンが活性化されないから　④ サッカーをすることがストレスになっていたから
⑤ 調査する対象が１つの病院だけと偏っていたから

4) 2)の比較研究の結果、仮説を立証する結果が得られた場合、この研究につけるタイトルとしてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① サッカーをしてうつ病を予防しよう
② サッカーでうつ病を改善しよう
③ サッカーでセロトニンを活性化しよう
④ スポーツで精神障害を改善しよう
⑤ セロトニンを活性化してうつ病を改善しよう

[３]

あなたは４技能（Reading / Writing / Listening / Speaking）全てを含む英語力と、英語圏への海外留学滞在期間の関係について調べようとしています。あなたの考えた仮説：「半年間の英語圏への海外留学を通じて語学学習をすることは、日本国内で語学学習をすることよりも効果的である」を証明するために、大学生を対象に行う実験として最も適当なものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① 大学の英語の成績と留学経験についてのアンケート調査を行い、留学の経験やその期間とそれぞれの学生の英語力を*GTEC（４技能試験）で測り、相関を調べる。
② これから半年間留学予定の学生 20 人に GTEC（４技能試験）を受けてもらい、留学帰国後に同学生 20 人に再び GTEC（４技能試験）を受けてもらい、事前の結果と比較する。
③ 半年の留学経験のある学生 20 人と、留学未経験の学生 20 人の英語力を GTEC（４技能試験）で調べ、それぞれのグループの平均点を比べる。
④ 100 人の学生に仮説「半年間の英語圏への～効果的であると思いますか」というアンケート調査を行い、その結果を示す。
⑤ これから半年間留学予定の学生 20 人と留学をしない学生 20 人に GTEC（４技能試験）を受けてもらう。半年後に 40 人全員に GTEC（４技能試験）を受けてもらい結果を比較する。

*GTEC（４技能試験）とは、ベネッセが作成している英語力を調査する試験である。ここでは、毎回の GTEC（４技能試験）はレベルが同じであり、問題内容は違うものとする。

[4]

問題提起とは,「この研究に取り組むことでどのようなことに答えようとしているのか、またなぜ答えなければならないのか」を明確に述べることである。高校生が課題研究における問題提起について心がけるべきこととして適当なものを次の①～⑤から１つ選びなさい。

① 問題提起は研究の独自性が大変重要であるため、先行研究の結果にとらわれず、自分の独創性を追い求めるほうがよい。
② 研究においては独自性が大変重要であり、問題提起においてもあなたの興味を中心にテーマを絞り、研究の意義についてもあなたが興味を持ったきっかけを述べたほうがよい。
③ あなたの問題提起の切実さを伝えるには、なぜその問題を解決しなければならないのか，その裏付けとなる現状や事実を背景として述べることが効果的である。
④ 問題提起はあなたの身の回りの小さな事象にとらわれることなく、グローバルな視野を持って、環境や生命といった社会の根幹をなす大きなテーマについて述べるほうがよい。
⑤ 他の研究ですでに明らかになっていることを問題にはできないので、先行研究をよく調査して、できるだけ先行研究が存在しない研究テーマを探すことが効果的である。

[5]

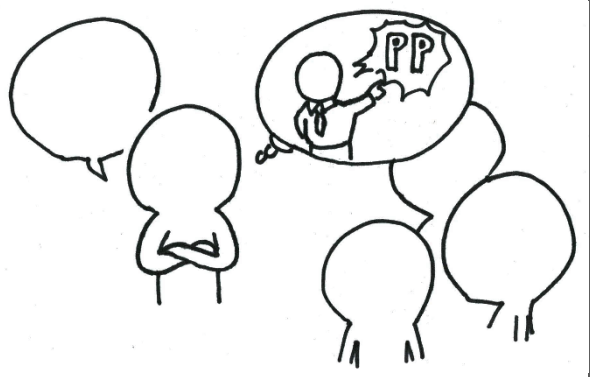
高校生のあなたは、大阪の貧困問題をどのように解決することができるのかという課題研究に取り組もうとしています。このテーマの課題研究を進める中で最も行うべきでない研究方法を次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① 大阪の貧困が問題となっている地域へ足を運び、そこで暮らしている人々に貧困問題の原因についてのインタビューやアンケート調査を行う。
② 大学等で貧困問題を専門に研究している人に、大阪の貧困問題の原因についてお話を聞かせてもらう。
③ まずは、大阪だけにこだわらず、様々な貧困問題の根本的な原因がどこにあるのかを本やインターネットを使って文献調査を行い、根本的な問題点を模索する。
④ 大学等で貧困問題を専門に研究している人の行ったアンケート調査を高校生対象に再調査する。
⑤ まずはテーマに関連する先行研究を集め、その研究結果から問題点を模索する。

[6]

あなたは課題研究班のリーダーを務めています。最終発表会までの１ヶ月を切りましたが、パワーポイントのスライドをまだ作成しておらず、先生に２週間後に提出するよう求められています。下の絵は、あなたが今後どのように研究を進めていくのかを班のメンバーと話している場面を表しています。次の①～⑤の中で、あなたが一番話しそうなものを１つ選びなさい。

① 皆で分担してスライド作っていこう。それを合わせたらできるよね。
② 提出まで２週間しかないけど、もう少し研究深めていこう。スライドづくりはその後にしよう。
③ スライドは僕（私）が作るよ。でも研究の話も進めないといけないから、みんなも考えておいてね。
④ とりあえずスライドはみんなに任せるよ。僕（私）は発表内容を考えておくからね。
⑤ スライドづくりは誰か取り掛かっといてくれる。平行して僕（私）も、スライドに使えそうなアイデア考えるよ。



［ ７ ］

下の絵は、授業中に前回の授業で配られたプリントが見当たらず、それを先生に見つかってしまった場面である。次の①～⑤の中で、あなたが先生の質問に答えそうなものを１つ選びなさい。

① すみません、余ってるプリントがあればください。
② 友達に貸して、そのままなんです。
③ 探しても無いんです。どうしたらいいですか。
④ 隣の子に見せてもらって授業を受けてもいいですか。
⑤ あとで改めて探すので、とりあえず今だけお借りできますか。

［ ８ ］

あなたは４人チームで１年間課題研究に取り組んできました。パワーポイントを使った発表を行った後の質疑応答の際に、あなたの研究テーマを専門としている大学の先生から質問をされました。しかし、その質問には専門用語も入っており、会場の聞き手からすると理解が難しく、また自分たちの研究論点から外れているように感じました。この時あなたならどのように対応しますか。あなたの考えに最も近いものを①～⑤の中から１つ選びなさい。

① ４人で質問内容をその場で話し合い、わかる人に答えてもらう。
② 質問内容を自分なりの解釈で言い直し、先生の質問の意図と相違がないことを確認した上で質問に答えようとする。
③ 先生の質問は研究の論点から外れていると感じたので、論点が外れていることをそれとなく伝えながら質問に答える。
④ 憶測で答えを出すわけにはいかないので、正直に「わかりません」と答える。
⑤ 質問の意図はよくわからないが、自分たちの発表を理解してもらうために、もう一度研究内容を要約する。

［ ９ ］

あなたは４人班で課題研究に取り組んでいる。研究班のリーダーから１ヶ月後の会議までに各メンバーそれぞれに仕事がふられた。あなたは、会議の３日前にいざ仕事をしようと取り組み始めたが、到底３日では終わらない分量であると気づいた。そのときあなたがとる行動として最も近いものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

① 残りの３日間、精一杯の努力をして、出来ているところまでやり、メンバーに謝りつつ出来たところまでを会議で提出する。
② その日は自分でどうすることが一番かをよく考えて、次の日に自分で考えた対策をリーダーに相談する。
③ グループ外の自分と同じような役割の準備が終わっている友達に教えてもらい、なんとか終わらせる。
④ すぐにリーダーに仕事が終わらない旨を報告し、リーダーとともに対策を考える。
⑤ 同じ状況の人がいないか、他のメンバーに連絡をして、さりげなく進捗状況をうかがう。

［ １０ ］

あなたは韓国との交流事業に参加して、韓国のソウルの高校に行きました。交流をしている中で、韓国の高校生から「独島」についてどう思うかと聞かれた時のあなたの答えとして最も近いものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。なお、独島とは、島根県隠岐の北西海上にある島で、日本名は竹島のことである。現在韓国が実効支配しており、日本韓国共に自国領であることを主張している。

①韓国が占拠している独島（竹島）は日本固有の領土だから、早く日本に返すべきだ。
②韓国が独島（竹島）は韓国領だという主張はよく理解できるので、韓国の立場を尊重したい。
③独島（竹島）は、韓国政府同様に日本政府も自国領であることを主張している。自分は日本領だと思うが、両

政府の話し合いでこの問題が早く解決することを願っている。
④この問題は日本・韓国政府が話し合うべき問題である。しかし、今日は日韓の高校生が相互理解のために交流をしようと集まっているので、この問題はひとまず置いて、お互いの国の文化について紹介しあうよう促す。
⑤どちらの政府も自国領であるという主張に一定の根拠がある。このような国境近い地域の領土問題については、長い時間の話し合いの過程で、よい解決方法が見つかる可能性もあるので、長い時間をかけて話し合う必要がある。

[１１]
次の①～⑤の記述のうち、最も正しい思うものを１つ選びなさい。

① テロや内戦が多発している中東の人々は、本質的に攻撃的な人々が多い。
② 東南アジアは発展途上国であるため、その国民のほとんどは、貧困状態である。
③ ほとんどのアメリカ人はメキシコのことをよく思っていない。
④ 東南アジアの国では、水道水を飲まないほうがよい。
⑤ 衛生面から、東南アジアの屋台では食事をしないほうがよい。

[１２]
SDGs（Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標））とは、2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟 193 か国が 2016 年～2030 年の 15 年間で達成するために掲げた 17 の目標のことを指します。その最初の目標に「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」がありますが、その目標と世界の貧困の現状について以下の文章の空所[A]～[C]に入る数字の組み合わせとして最も適当なものを①～⑤の中から１つえらびなさい。

SDGs の最初の目標は、2030 年までに、現在 1 日［ A ］ドル未満（貧困ライン）で生活する人々と定義されている極度の貧困をあらゆる場所で終わらせることである。しかし、世界には約［ B ］億人の人口がおり、そのうち約［ C ］億人が飢餓や貧困に苦しんでいます。

①A： 1.25　B: 67　C: 20　　②A： 1.25　B: 50　C: 20
③A： 1.25　B: 67　C: 10　　④A： 2.25　B: 50　C: 20
⑤A： 2.25　B: 67　C: 10

[１３]
タイの文化について誤りがあるものを、次の①～⑤の中から１つ選びなさい。
① タイ料理にはトム・ヤム・クンやカオ・マン・ガイなど多彩なレパートリーがある。
② タイでは右手が清浄、左手が不浄とされているから、公式な場では左手を使わない。
③ タイでは昔、スコータイやアユタヤーなどの古代王朝が栄えた。
④ タイは日本と同じ仏教国であり，中国から大乗仏教が伝わり広まった。
⑤ タイ語には語尾に丁寧語を添えたほうがよいが、丁寧語は男性と女性では異なる。

[１４]
あなたは大阪難波の道で外国人に声をかけられました。その時あなたが答える返答として最も近いものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

Tourists: “Excuse us. We’d like to go to Tokyo Sky Tree. How can we get there?”
You: “_____“

① How are you going to go?　There are some ways to go to Tokyo.

② You can take an airplane to Tokyo.
③ It takes a lot of money and time, so you should have a sightseeing here.
④ I will take you there.
⑤ A bus for Tokyo leaves from Osaka station, so go there first, then you can ask someone again.

[１５]
あなたは留学生のホストファミリー募集の話をきき、自身の英語の勉学にもなると考え、家族で話し合い留学生の受け入れを行うことにした。その後、東ヨーロッパのある国からきた大学院生のＡさん（女性）を１年間受け入れることが決まった。初めて会った彼女の印象は、まじめで、おとなしそうな雰囲気であった。また彼女は、日本語や日本の文学史を学ぶという目的のため留学しており、志も高く感じられた。しかし彼女は、日本語を読むことは可能であったが、会話では流暢に操れない状態であった。あなたがＡさんの留学期間中に、可能な限り彼女とトラブルなく過ごすために、初期の段階で行うと良いと思う行動を、下の①～⑤から１つ選びなさい。

① 日本の文化に慣れてもらうため、巻き寿司や煮物などを多く作り、小皿に取り分けて食事を行った。
② 食事後の自分のお皿は自分で洗うという家庭のルールがあったため、彼女にも遵守してもらった。
③ 綺麗な場所で過ごしてもらうために、Ａさんが母と出かけている間に、彼女の部屋を掃除した。
④ 帰宅が夜遅くになると心配なので、出かけた際、電話で何時に帰宅するか報告するようにさせた。
⑤ 日常生活の会話で困難をきたすのは申し訳ないので、彼女との会話は、家族全員英語で行った。

[１６]
あなたは文化祭の会計責任者です。文化祭終了後 10 日以内に全ての団体の予算の執行額を、文化祭総務の先生に報告をしなければならなかったのですが、期日を過ぎてもＡ団体が報告をしていません。あなたは何度も期日を守るようにＡ団体に働きかけたのですが、その団体には「期日には間に合わない」と言われました。総務の先生とあなたは期日 10 日間の妥当性について十分に話し合った上で各団体に伝えているという経緯もあり、総務の先生には、あなたにも責任があると責められました。この時にあなたがとる行動として、最も近いものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① 期日については団体に話をしたので、先生には、自分ではなくＡ団体の代表者を怒ってもらうように頼む。
② 期日に間に合わなかったＡ団体に対する自分の管理が悪かったので、自分１人で先生に謝る。
③ Ａ団体の代表者に、私がその団体のせいで先生に怒られたことを伝え、代表者から先生へ謝るように促す。
④ 期日が短かったというＡ団体の言い分に同意し、その代表者と２人で先生に抗議する。
⑤ 期日を守れなかったＡ団体とその状況を作ってしまった自分の２人で先生に謝る。

[１７]
あなたは課題研究において、グループのリーダーを任されています。ある時、メンバーの一人が分担した課題を行わなかったせいで、発表に間に合わない状態になりました。幸い発表日を変更してもらい、なんとか発表そのものは行うことができましたが、決して満足のできる発表ではありませんでした。先生には比較的穏やかな表情で、次から気をつける様にと言われました。この時のあなたのする行動として最も近いものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① 課題を行わなかったメンバーに二度とこういうことがない様に厳しく注意する。
② 課題を行わなかったメンバーとなぜやってこなかったのかを二人きりで話し合う。
③ 次に同じような失敗が起きないように、グループ全員で情報を共有する。
④ あまり落ち込まずに、気持ちを切り替えて次の研究に取り組む様にメンバー全員に伝える。
⑤ 次に同じような失敗が起きないように、今回の失敗の原因を自分で勘案する。

[１８]
あなたは高校の部活動でバスケットボール部に所属しています。ある試合で、あなたのミスで試合に負けてし

まい、あなたは顧問の先生から厳しく叱られました。あなたは敗戦の責任を十分受け止めていますが、顧問の先生の立てた戦略が悪かったのではないかという気持ちもあります。顧問の先生は部活に非常に厳しいことで知られており、チームメイトもあなたをかばってくれる気配はありません。この時のあなたのする行動として最も近いものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① 先生の怒りが冷めるまで、数日間は緊張して注意深く行動する。
② その日はしっかりと反省し、翌日から気持ちを切り替えていつも通り振る舞う。
③ 先生の怒りが少しでも早く直る様に言葉を選んでしっかりと謝罪する。
④ 相談に乗ってくれそうな人を探して、どの様に対応するべきか相談する。
⑤ 自分の気持ちについて思い切って先生に話してみる。

[１９]
あなたは、クラスメイトのＡ君、Ｂ君、Ｃ君、Ｄ君の５人班で課題研究をすることになりました。班のテーマを１つに決めなければなりませんが、あなたの調べたい内容と、それぞれの調べたい内容が異なっています。Ａ君とＢ君はほとんど同じような内容に興味を示していますが、あなたは自分の興味のある内容が班の課題研究をする上で、一番進めやすいと思っています。あなたがとる行動として最も近いものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① 公平に多数決で決めるべきなので、仕方がないがＡ君とＢ君の案で決定する。
② 課題研究の進めやすさを考慮して、他の班メンバーに自分のテーマを選ぶようにアピールする。
③ それぞれの調べたい内容と理由を班内で簡単に発表し、どれが一番良いかを決定する。
④ じゃんけんやくじ引き等、公平な手段を用いてテーマを決める。
⑤ まずは班のリーダーを決め、そのリーダーの提案する決め方でテーマを選ぶ。

[２０]
あなたは体育祭の応援団の副団長をしています。１週間後の体育祭で応援披露を行うことになっていますが、団長が怪我をしてしまったため、団長が応援を披露することができなくなってしまいました。団長は踊ることはできませんが、これまで通り練習に参加し、団員に指導を行っています。しかし、団長が怪我をした日から、あなたには団員の士気が下がってしまったように感じています。ある日、あなたは団員Ａさんから、応援団を辞めたいという話を相談されます。学校のルールでは、応援団に所属している生徒は応援団を途中で抜けることはできないと決まっています。その時のあなたのとる行動としても最も近いものを次の①～⑤の中から１つ選びなさい。

① 団長にこれ以上の不安を与えないためにも、まず１対１でＡさんと話合い、辞めさせないように話をする。
② 団長の状況は理解しつつも、団員が辞めたいという大きな問題に１人で対応するべきではないと考え、すぐに団長に相談する。
③ 応援団はルールとして、一度応援団に所属したら辞められない決まりがあるので、先生の方からＡさんに辞めないように説得してもらう。
④ このような状況を考えると、自分でもどうしていいのかわからないし、Ａさんが辞めたい気持ちもわかるので、辞めないように１人で対応してみるが、説得できなかった場合は後日団長に報告する。
⑤ Ａさんと１番仲のいい他の団員に相談し、その団員からＡさんを説得してもらう。説得できなかった場合は後日団長に報告する。

問題は以上です。

Ⅴ　成果の普及

1．「これでかわる！探究学習の指導」の書籍化と出版・配布

平成 31 年 4 月に発刊。令和 2 年 2 月までに 612 冊を希望する学校教育関係者に配布した。掲載する 19 の学習ツールのデジタルデータはホームページにアップし，自由にダウンロードして学校現場に応じて変更・活用できるようにした（p11 参照）。

2．取材

（1）日本教育新聞社

上記の書籍に関して、日本教育新聞の令和 2 年 1 月 20 日の記事に掲載された。

高校・特別支援学校　（第3種郵便物認可）　日本教育新聞

平野メソッド「課題探究学習ツール」を冊子に

効果的なカリキュラム、指導法開発

「逆引きロジックツリー」など収録

ニーズに合わせて各校でアレンジを

大阪教育大学附属高校平野校舎

学校独自で「平野メソッド」と呼ばれる「課題探究学習ツール」（カリキュラムや指導法など）を開発し、多くの実践に取り組んできた大阪教育大学附属高校平野校舎（大田順康校長、生徒360人）。これまでの成果について冊子「これでかわる！　探究学習の指導　生徒の主体的な学びの実現をめざして」＝写真＝にまとめた。同冊子には、学習ツールの使い方やそれを作成したねらいなどを収録。畑川芳介副校長は「学校の指導方針などに応じ、アレンジして活用してもらえれば」と話している。

同校は2015（平成27）年度からSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受け、生徒が自主的に調査や研究に取り組む「課題研究」の実践を本格的にスタートさせた。総合的な学習の時間で取り組んできた内容を、1～3年生の「課題研究」としてまとめ、系統立てて指導を行っている。テーマは「医療・保健」「格差・貧困」「防災・減災」に関わるもの。各学年で教員打ち合わせの会議を行い、授業に臨んでいる。

研究を進めるに当たり、さまざまな課題があった。例えば、指導者が専門ではない内容を扱わなければならない場面、多くの時間を費やして活動しても、その効果が見えにくかったことなど。これらの課題分析や情報収集を行いながら、指導法を考案し、授業実践を重ねた。その中で効果的だったものを「平野メソッド」にまとめた。山崎勝龍教諭は「汎用ツールを独自に改良しながら使えば、生徒との共に教員自身が探究学習に自信を持てる」と話す。

主体的に課題と向き合い、解決に向けて熱心に話し合う生徒たち

担当教員の関わも

同冊子には、まず「本書の目的と活用の仕方」と「課題研究の流れとツール」に関する説明を収録し、その後、同校が開発し、授業で活用しているテーマさがしチームづくりに役立つツールやワークシートの紹介が続いている。

具体的には、「頭みから」「逆引きロジックツリー」など、授業のねらいに応じて活用できる19のツール。このうち「逆引きロジックツリー」は、「考察とまとめ」や「提案と考察」などの関連を明確にし、「目的―方法―内容―考察―まとめ」の一貫性を可視化できるのが特色になっている。生徒自身の自己チェックにも役立てることができる。

19のツールは全て使わないと効果がないというわけではない。各ツールは個別に使用することができる。同校では、「学校ごとの課題やニーズなどに合わせてアレンジしてもらえれば」という方針を掲げる。

「探究的な学習」の指導は、一人一人の教師の力量に委ねられている部分もある。どのような順序で授業を組み立て、多くのグループが同時に活動を進めていく中で指導教員はどのように関われればよいのかなど、そのような点も参考になりそうだ。

希望あれば提供

同冊子は市販されていないため、同校に問い合わせをすれば一校につき一冊は提供できるという。掲載されている各ツールのデータについては、同校のホームページにも掲載されており、自由に活用することができるようになっている。

実際の授業を参観したい場合は、事前に申し込みをすれば生徒不在日の午後は視察が可能になっている。

「各学校で活用し、改善したものは本校にも提供してほしい」と語るSGH推進委員長の船津隆教諭。探究的な学習に関する研究コミュニティーを築くことができればとも話している。

附属高校平野校舎＝☎06・6707・5800

３．研究成果発表及び交流

（１）トビタテ！留学 JAPAN　４名合格

官民協働海外留学制度「トビタテ！留学 JAPAN」に応募した５名が合格した。

（２）カンボジアでの普及

８月のカンボジア FW では、本校生が「手洗いのすすめ」に関するプレゼンを現地看護師とドクターに対して行った。SUSU プロジェクトでは現地の女性工員の前で課題研究の成果を発表した。

（３）一般財団法人理数教育研究所「Rimse」No25 号に本校の取組の記事を掲載

理数教育研究所の依頼により、本校教員が学校関係者向けの冊子「Rimse」に本校の課題研究の取組に関する記事を執筆。掲載された。

（４）9 月 10 日・11 日　「世界津波の日」2019 高校生サミット in 北海道

北海道で開催された「世界津波の日」2018 高校生サミット in 北海道に 2 年生 2 名が参加し、「防災・減災」領域で研究している内容をもとに提言した。

（５）11 月 9 日（土）　教員研修・交流会

教員研修・交流会を開催。全国から学校関係者 69 名の参加をえて、平野メソッドや教科の授業実践例について本校の取組を発信した。詳細は「Ⅳ．６　教員研修・交流会の成果と課題」に記す。

（６）12 月 22 日（日）All Japan High School Forum2019

文部科学省、筑波大学共催のフォーラムに本校生４名とアジア高校生架け橋プロジェクトで受け入れている留学生１名が参加した。

（７）1 月 11 日（土）　本校課題研究発表会

本校の課題研究発表会を開催し、1，2 年生全員（62 グループ）と招待校 9 校（17 グループ・40 名）が課題研究の成果を発表しあい、交流した。

（８）第 66 回国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール

本校１年生が、「日本における持続可能な開発目標（SDGｓ）の達成に向けて、私たちが国連とできること」というテーマで自身の考えを述べ、大阪府２位となった。

（９）高校生国際シンポジウムでの発表

一般財団法人 Global Academy 主催第５回高校生国際シンポジウムに本校２年生４名が参加し、課題研究の成果を発表した。

(10) 大学生への授業、教育実習

・大阪教育大学教員養成課程の学生対象の授業「アクティブラーニング入門」で、本校教員が「課題研究」の指導方法について講義を担当した。

・本年度、附属平野五校園（幼・小・中・高・特支）で教育実習を行う大阪教育大学の学生（30 名）に、1，2 年生の課題研究の授業を参観させ、その指導について説明した。

(11) 国内・海外の教員視察

・本校の SGH の取組について、国内３校、海外３校の学校より関係者の視察を受け入れた。

Ⅵ.　研究協力者・団体一覧

運営指導委員

大阪府教育庁教育振興室高等学校課教務グループ	指導主事	福本　美紀氏
立命館大学大学院教職研究科	准教授	田中　博氏
（株）マネジメントスタイル研究所	代表取締役社長	土井　義孝氏
タカラベルモント（株）	執行役員	花畑　暢夫氏
甲南女子大学看護リハビリテーション学部	教授	中村　安秀氏

アドバイザー

京都大学大学院工学研究科	教授	藤井　聡氏
大阪教育大学教育協働学科	教授・学科長	安部　文司氏
大阪教育大学	理事・副学長	伊藤　敏雄氏
大阪教育大学科学教育センター	教授・センター長	片桐　昌直氏
大阪教育大学教職大学院	教授	田中　滿公子氏
大阪教育大学科学教育センター	教授	仲矢　史雄氏
大阪教育大学附属学校課	課長	牧野　弘史氏
大阪教育大学家政教育講座	教授	鈴木　真由子氏

防災・減災領域

京都大学大学院工学研究科	教授	藤井　聡氏
大阪市立大学大学院理学研究科	教授	三田村　宗樹氏

関西学院大学学生の皆様
大阪市立大学学生の皆様
神戸大学学生の皆様
京都大学学生の皆様
（フィールドワーク）
此花区役所危機管理課
京都市市民防災センター
大阪大学微生物病研究所
ＮＴＴ西日本大阪支社
神戸防災センター
洛和会京都音楽療法研究センター
大阪国際交流センター
稲むらの火の館
平野区役所生活安全課
なかまの里
大阪教育大学附属特別支援学校
アルカディア株式会社

格差・貧困領域

大阪大学社会ソリューションイニシアティブ	教授・ＳＳＩ長	堂目　卓生氏
有限会社ビッグイシュー日本	販売サポートスタッフ	吉田　耕一氏

有限会社ビッグイシュー日本	販売員	西岡　稔氏

関西学院大学学生の皆様
大阪市立大学学生の皆様
神戸大学学生の皆様
京都大学学生の皆様
（フィールドワーク）
和泉市役所
駒川商店街
大阪労働局職業安定課
大阪国際交流センター
子どもの居場所まーる
海の子学園入舟寮
平野新生苑
大阪市立市岡中学校
大阪市役所健康局健康づくり課、福祉局自立支援課
高槻市役所
ViVa!宿題カフェ
大阪府堺留学生会館
大阪大学国際交流館
大阪教育大学柏原キャンパス
ゼネラルユニオン

医療・保健領域

甲南女子大学看護リハビリテーション学部	教授	中村　安秀氏
社会医療法人健生会土庫病院	リハビリ医	洲脇　直己氏
難病学生患者を支援する会	代表	久保田　一男氏
大阪大学微生物病研究所	大学院生	藤谷　好弘氏

関西学院大学大学院学生の皆様
大阪市立大学学生の皆様
神戸大学学生の皆様
京都大学学生の皆様
（フィールドワーク）
大阪大学医学部附属病院国際医療センター
大阪大学経済学部
大阪精神医療センター
近畿農政局
大阪大学医学部附属病院整形外科
大阪大学医学部附属病院未来医療センター
小児歯科フルフィル
日本ポリグル株式会社
大阪歯科医師会

Ⅶ. 運営指導委員会議事録

（1）日時　　1月11日（土）　附属高等学校平野校舎大講義室
（2）出席者　伊藤敏雄教授（大阪教育大学理事・副学長）
片桐昌直教授（大阪教育大学科学教育センター長）
仲矢史雄教授（大阪教育大学科学教育センター）
鈴木真由子教授（大阪教育大学教員養成課程家政教育講座）
附属校舎平野校舎：太田順康校長、佐藤賢司校舎主任、堀川理介副校長
中村彰男主幹教諭、松田雅彦SGH推進委員長、山﨑勝載教諭、
鏑木昌博教諭、武部俊輔教諭、近藤真之教諭、熊原真史教諭
（3）学校からの説明
a　学校側より本年度及び5年間の活動報告（松田）
・5年間の活動の概要
・課題研究の指導と教科の指導の往還について
・コンピテンシーに着目した指導と評価
・「4つの力」の育成と教員間連携の深化
・「平野メソッド」を活用した教科の授業実践
b　評価開発（武部）
・46期（SGH3期生）のPROG-Hの結果からわかること
・GPATの作成と本校生・他校生のデータについて
（4）　質疑応答・指導助言
・SGH対象生徒の卒業後のようすについて、追跡調査を実施してほしい。
・卒業生がTA（ティーチングアシスタント）として課題研究などを指導するサイクルができることが理想である。
・課題研究の発表会では、ポスターの書式も揃っていて見やすく、研究の導入にあたるデータ分析が充実している。
・アクションプランを考える上で、データ収集をもっと充実した方がよい。
・アンケートの取り方などを大学教員から指導してもらい、研究に活用すると一層よくなる。
・一昨年、昨年、今年と、年を重ねるごとに研究発表の内容が充実してきた。特に本年度の発表を聴くと、エビデンスに基づく論理展開や主張という点でこれまでより向上している。
・大学教員との連携をさらに深め、幅広い指導をしていくとよい。
・平野校舎のSGHの取組は、他校から高く評価されている。
・大学で学生を指導していると、SSHやSGHなどの活動を指導したいために教員を志望する学生が増えていると感じている。教員養成の意味でも、生徒にとっても、この活動には魅力があると思う。
・課題研究が、附属平野小学校・附属平野中学校・附属高校平野校舎で共通に意識されるようになったと感じている。
・研究開発当初、生徒のPROG調査の結果から育成すべき資質能力を決め、教員が共通認識して教材開発などに全校あげて取り組んできた。それが現在の成果につながっていると思う。
・5年間の研究開発にあたって、教員のめざす方向がまとまり大きな力を発揮したと感じている。今後も、生徒の課題・伸ばすべき資質能力を見定めて、その分野に対して重点的な指導とその研究、教材開発を継続していくべきである。

（第2回運営指導委員会は、新型コロナウィルス感染防止の観点から中止となった。）

教育課程表

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

ＳＧＨ１期生（平成 27 年入学）ＳＧＨ２期生（平成 28 年入学）

教科	科目（標準単位数）	1年	2年	3年 共通	3年 文系	3年 理系
国語	国語総合	4				
	現代文A					
	現代文B		2	2		
	古典A				2	
	古典B		2	2		
地理歴史	世界史A		2			
	世界史B				○4 ●3 ○から1科目選択	○3 ○から1科目選択
	日本史A		2			
	日本史B				○4 ●3 ●から1科目選択 計7単位	○3
	地理B				○4 ●3	○3
公民	現代社会	2				
	倫理				○4 ●3	○3
数学	数学Ⅰ	3				
	数学Ⅱ		3			
	数学Ⅲ			4		
	数学A	2				
	数学B		2			2
理科	物理基礎		2		☆2 ☆から2科目選択 計4単位	
	物理					□4 □から2科目選択 計8単位
	化学基礎	1	1		☆2	
	化学					□4
	生物基礎	2			☆2	
	生物					□4
保健体育	体育	3	2	2		
	保健		1＊①			
芸術	芸術Ⅰ	2				
英語	コミュニケーション英語Ⅰ	3				
	コミュニケーション英語Ⅱ		4			
	コミュニケーション英語Ⅲ			3		
	英語表現Ⅰ	1				
	英語表現Ⅱ		2	2		
家庭	家庭基礎		2			
情報	社会と情報	1＊②				
総合	Approach	3				
	Basic		2			
	Challenge Development			1		
学校設定教科	生命の倫理	1＊③				
	公共と経済	1＊④				
	大阪大学セミナー		(1＊⑤)			
	LHR	1	1	1		
	総計	30	30(31)	30		

＊①②：必履修科目が標準単位数を下回る教育課程の特例。＊③④⑤：学校設定科目。
（　）は選択者

教育課程表

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

ＳＧＨ３期生（平成 29 年入学）ＳＧＨ４期生（平成 30 年入学）

教科	科目（標準単位数）	1年	2年 共通	2年 選択	3年 共通	3年 文系	3年 理系
国語	国語総合	4					
	現代文Ａ						
	現代文Ｂ		2		2		
	古典Ａ					2	
	古典Ｂ		2	△1	2		
地理歴史	世界史Ａ		2				
	世界史Ｂ					○4 ●4 ○から1科目選択 ●から1科目選択 計8単位	○4 ○から1科目選択
	日本史Ａ		2				
	日本史Ｂ					○4 ●4	○4
	地理Ｂ					○4 ●4	○4
公民	現代社会	2					
	倫理					○4 ●4	○4
数学	数学Ⅰ	3					
	数学Ⅱ		3				
	数学Ⅲ				4		
	数学Ａ	2					
	数学Ｂ		2				2
理科	物理基礎	1	1			☆2 ☆から2科目選択 計4単位	
	物理			△2			□4 □から1科目選択
	化学基礎	1	2			☆2	
	化学						5
	生物基礎	2				☆2	
	生物			△2			□4
保健体育	体育	3	2		3		
	保健		1＊①				
芸術	芸術Ⅰ	2					
英語	コミュニケーション英語Ⅰ	3					
	コミュニケーション英語Ⅱ		4				
	コミュニケーション英語Ⅲ				3		
	英語表現Ⅰ	2					
	英語表現Ⅱ		2	△1	2		
家庭	家庭基礎		2				
情報	社会と情報	1＊②					
総合	Approach	3					
	Basic		2				
	Challenge Development				1		
学校設定教科	生命の倫理	1＊③					
	公共と経済	1＊④					
	大阪大学セミナー			(1＊⑤)			
	ＬＨＲ	1	1		1		
	総計	32	32(33)		18	14 計32	15 計33

２年の選択については、△から２単位を選択する。

＊①②：必履修科目が標準単位数を下回る教育課程の特例。＊③④⑤：学校設定科目。
（　）は選択者

教育課程表

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

ＳＧＨ５期生（平成 31 年入学）

教科	科目（標準単位数）	1年	2年 共通	2年 選択	3年 共通	3年 文系	3年 理系
国語	国語総合	4					
	現代文Ａ						
	現代文Ｂ		2		2		
	古典Ａ					2	
	古典Ｂ		2	△1	2		
地理歴史	世界史Ａ		2				
	世界史Ｂ					○4 ●4 ○から1科目選択 ●から1科目選択 計8単位	○4 ○から1科目選択
	日本史Ａ		2				
	日本史Ｂ					○4 ●4	○4
	地理Ｂ					○4 ●4	○4
公民	現代社会	2					
	倫理					○4 ●4	○4
数学	数学Ⅰ	3					
	数学Ⅱ		3				
	数学Ⅲ				4		
	数学Ａ	2					
	数学Ｂ		2				2
理科	物理基礎	2				☆2 ☆から2科目選択 計4単位	
	物理			△2			□4 □から1科目選択
	化学基礎		3			☆2	
	化学						5
	生物基礎	2				☆2	
	生物			△2			□4
体育 保健	体育	3	2		3		
	保健		1＊①				
芸術	芸術Ⅰ	2					
英語	コミュニケーション英語Ⅰ	3					
	コミュニケーション英語Ⅱ		4				
	コミュニケーション英語Ⅲ				3		
	英語表現Ⅰ	2					
	英語表現Ⅱ		2	△1	2		
家庭	家庭基礎		2				
情報	社会と情報	1＊②					
総合	Approach	3					
	Basic		2				
	Challenge Development				1		
学校設定教科	生命の倫理	1＊③					
	公共と経済	1＊④					
	大阪大学セミナー			(1＊⑤)			
	ＬＨＲ	1	1		1		
	総計	32	32(33)		18	14 計32	15 計33

２年の選択については、△から２単位を選択する。

＊①②：必履修科目が標準単位数を下回る教育課程の特例。＊③④⑤：学校設定科目。
（　）は選択者

平成 27 年度　スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書・第５年次

令和 2 年 3 月 31 日発行

発行者　大阪教育大学附属高等学校平野校舎
〒547－0032　大阪市平野区流町 2－1－24
TEL　06－6707－5800　FAX　06－6709－1711